

市制施行25周年及び戦後50年記念事業

私たちの記憶

— POST WAR 50 YEARS —

新座市

はじめに

今年、我が国は戦後50年という節目の年を迎えました。

終戦から半世紀が過ぎた今、戦争の悲惨さが、はるか遠い歴史的な出来事になり、様々な体験が風化しようとしてえています。

そこで、この50年を振り返り、平和の尊さについてもう一度考えるとともに、戦争の悲惨さを改めて心に思い起こし、その体験を風化させることなく後世に語り継ぐために戦中及び戦後50年の生活に基づいた体験記等を募集したところ、多くの皆様からご応募をいただきました。

なかでも戦争体験記には、想像を絶する悲惨な体験が語られており、切に平和を願う気持ちが私たちの心に響きます。こうした戦争によるむごい体験をし、未だ計り尽くせない苦悩や苦痛を抱えている方々がいらっしゃることを思うと二度と過ちを繰り返してはならないという決意が湧き上がります。

また、世界の各地には、現在も戦火がくすぶり、尊い人命が失われ、苦しい生活を余儀なくされている人々が多くいることも忘れてはなりません。

人種や宗教、国の境を超えて、自由と平等による、真に平和な世界が実現されることを願わずにはられません。

終わりにあたり、思い出すのも辛い体験を、勇気を出してお寄せいただいた方、平和への願いを短歌に託された文化団体の方、平和への熱い思いを寄せられた海外派遣団参加の中学生並びに新成人の方など、本趣旨に賛同し、ご協力いただいた市民の皆様に、ここで改めて深く感謝を申し上げます。

平成7年11月

新座市長

須田健治

新座市健康平和都市宣言

“にいざ”って どんなまち さわやかな風が息吹き
楽しい語らいが聞こえ 笑顔があふれるまち

わたしたちは 緑にいきい
すこやかな心とからだ 育てます
平和を愛し 自由で明るいまち 築きます
ふれあいを大切に 協力と助け合い 広げます
そして こどもたちに バトンタッチ
健康で平和な 住み良いまちを

昭和63年6月4日

新座市人権尊重都市宣言

私たち新座市民は「すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とにおいて平等である」と明言された先の世界人権宣言を尊重し、互いに人権を守り、はぐくむことで「ふるさと新座」を創生していくことを明らかにするものであります。

そこで、私たちは日本国憲法に保障されている基本的人権尊重の精神に基づき、あらゆる差別を排し、市民一人ひとりが幸福で、自由に生きがいのある生活をおくれるよう、未来に続く平等で明るい地域社会の実現と世界平和を願い、ここに新座市を人権尊重都市とすることを宣言します。

平成7年11月1日

目

次

戦争体験記

東京大空襲	柴田悦子.....	1
日本人だから戦った	倉持喜一.....	1
戦後体験記	森尾イツ.....	3
戦後を生きる	高石定雄.....	5
あれから五十年	谷口定利.....	7
青春八十年	嶋根守次.....	8
東京大空襲に地獄をみた	木村光雄.....	13
私の記憶	渡辺富美子.....	16
戦時下の少女体験記	石山光恵.....	17
上海の終戦	松本哲哉.....	19
私の戦争体験	比嘉美佐.....	21
ヒロシマへの祈り	成島俊子.....	23
私の戦争体験	宮岡貞雄.....	25
私のための昭和二十年という年	菊地忠雄.....	27
戦争体験からの戒め	永松清英.....	30
戦後五十年	福島震太.....	32
戦争体験	井原ふみ江.....	33
慟哭の譜ー海行かば水漬く屍ー	森田勝郎.....	34
再会ー私たちの学童疎開	竹森絹子.....	37
あしあと	高橋庄吉.....	39
私の戦争体験記	藤森都.....	41
私の歩んだ戦後50年	根岸彩子.....	43
タマゴとファックス	北原眞一.....	45
平和へのメッセージ 細切れの伝言から	篠原朋子.....	47
葉山御用邸の思い出	長谷部益一.....	48

メッセージ —平和について思うこと—

Dr BAPAT VINIT		5 0
並木平八		5 0
谷合規子		5 0
保坂フミ子		5 1
久保佳之		5 1
竹森絹子		5 1
坂本周一		5 2
須藤雄太		5 2
匿名		5 2
鈴木健三		5 3
中川瑞葉		5 3
渡邊直子		5 3
匿名		5 3

短 歌

斉藤芳香		5 4
田山路子		5 4
森田綾子		5 4
小田桐きみ		5 4
清水保子		5 5
松本千恵子		5 5
島田知以子		5 5
諸貫信子		5 5
岡野正子		5 5

戦争体験記

東京大空襲(昭和20.3.10)

新堀 柴田悦子 65歳

3月9日夜、警戒警報より先に空襲警報のサイレンが鳴った。着のみ着のまま寝心地悪い。たまにはパジャマを着てゆっくり眠りたい。父が二階に飛び上がって起こしに来た時は、すでにB29がものすごい大きな爆音で低空飛行の大編隊で、あとからあとから上空を通る。灯火管制で真っ暗だ。手探りで(物不足でいくらか入ってない)リックを背に慌てて履いた靴はブカブカの兄の運動靴だった。母と手をつなぎ逃げていく人の後を追った。火の無い暗い大妻学校へ…突然目の前に、ゴォーゴォーガラガラシュシューと束になって火のついた油脂焼夷弾が、空中でバラバラになって、鉄の火柱の雨が降ってきた。屋根や道路に突き刺さったり街路樹に火がつき流れ出した油が見る間に火の海となり、靖国神社の立ち木も火がついていたので、千鳥ヶ淵へ逃げた。ひどい大空襲なのにひとけがあまりなく心細かった。焼けてきたらお堀の水に入ろうねと母が言った。向こう側の近衛連隊(今の武道館)の立ち木も燃えていた。低空のB29は大火災を映して真っ赤に光って大きく、とてもきれいで怖かった。下町では何万人もの死者がでたらしい。やっと空が白んで爆音も遠のき、こげ臭い九段上からは見渡す限り焼け野原でポツンポツンと銀行の建物が残り、上野の西郷さんまで見えた。我が家もすっかり焼けて白百合女学園の体育館へ避難し家族や近所の人と会えたが、母の田舎の栃木県に疎開する列車は混んで満員で乗れなくて窓から乗りました。戦災なので誰からの援助もなく、皆で励ましあい頑張って生きてきました。当時15歳でした。

日本人だから戦った

新堀 倉持喜一 72歳

私は英語勉強を兼ねて週間英字誌「ニューズウィーク」を購読している。雑誌には載らない記事、あるいは報道されてもニュアンスがちがう内容であったりして、非常に啓発されることがあるからだ。オウム真理教に関する報道に、日本のマスメディアが忙殺されている平成7年4月のおわり。小野田寛郎(おのだひろお)氏の最近の消息が、このニューズウィーク誌5月1日号のインタビュー欄に紹介されていた。いまはこの名前を聞いてもピンと来ない人が多いだろう。この人はかつて29年ぶりにフィリピン・ルバング島から救出された「小野田少尉」。奇跡の生存と、戦後に築き上げた繁栄のな

かに、高らかに「帰還申告」をした小野田少尉の現在の心境を聞きたいという意図であろうと察した。

私は西部ニューギニア・ソロンで餓死線上を彷徨したが、幸いに昭和21年6月に復員できた。戦いが終って一年後には帰国できたのは、まだ部隊編成でまとまっていたからである。もっとも、まとまっているがために、集団で労役につかされたシベリアでの旧ソ連の過酷な取扱いの例もあるが。ひとり、あるいは数人でジャングルにひそんでいたら、そして連絡もとれずにサバイバル生活をやっていたら、私はニューギニアの原野で朽ち果てていたにちがいない。

私は昭和18年12月に現役兵として軍隊に入った。戦後十ヵ月して帰国できた。華北新郷で三ヶ月の新兵教育を受け、夏服を支給された。きっと南方へいかされるのだろう、くらいの知識で軍用船但馬（たじま）丸に乗せられたのが昭和19年4月。出帆の前にはプサン港で昼夜兼行二日間、ありったけの軍需物資を積み込んだ。すでに内地では生活物資があらゆる面で影をひそめてしまっていた。埠頭の倉庫へ入ると、こぼれた小豆（あずき）がまるで敷き詰めた砂利のようになっており、私のくるぶしまでかくしてしまった。牛皮が一頭分巻かれていくつも積み上げてある。啞然として指示に従って運び出し船倉へ運び込む。そんなに苦労して積み込んだ物資が、一ヶ月したらすべて海の底に沈んでしまうとは誰も想像できなかった。まこと戦争ほどの浪費はない。

台湾の沖を航行しマニラに着く。床はコンクリートの倉庫で、一夜を明かした。毎日揺られ続けていた身には、このコンクリート床も、天国だった。足元が固定していることがどれほどありがたいか身にしてみた。

あとでわかったことだが、部隊は当時激戦が展開されていたビアク島へ向かう予定だったのだ。だが、マニラを出発する頃すでに同島は敵の手に落ち、行先は西部ニューギニアのどこかだという心もとなさ。

5月にはいって輸送船は十隻の船団を組んで進み、その周囲を駆逐艦が護衛する。船内は暑い。甲板のわずかな日陰で、私はトンツーの練習や操典類での勉強をする。けだるい午後、私は用事で船倉へおりていった。その時轟音とともに身体がとびあがった。もうもうと埃が舞い上がるなかで、私は小銃と弾帯をひきよせた。それ以外は離れたところにまとめられてあったので取りにゆくことができない。「甲板にあがれ」と指示が伝わる。すでに浸水がはじまっており、その水面がぐんぐん上がってくる。甲板へ出たら風が激しく吹いている。船が速力をあげたからだ。浮遊物がはやい速度で船尾に押

し流されていく。すでに沈んだ他船のものらしい。傾いた船の側壁から海中へ滑りおりるようにして海中に落ちた。したたかに海水をのんでしまった。船が沈むからできるだけ船から離れろ、と叫ぶ声。水泳には自信があった私は手足を動かして見た。だがいっこうに身体が前に進まない。船は船首をあげて急速に海中に没した。船内の大きな空洞が、巨大なボツという音響を発して南海の大空へ突き抜けた。

私は海中を泳ぎ始めて九時間後、駆逐艦五月雨（さみだれ）に救助された。すでにあたりは暗黒。私が甲板に引き上げられるのを待っていたように、艦は暗い海面に動き出した。このとき海没による戦死者は一割である。上陸してからの戦病死者はさらに甚大で、復員するまで次々と兵士は倒れていった。生き残るために密林を伐採し、開墾し、甘藷の苗を植え付けた。3ヵ月でいもが収穫できた。だが屈強な農村出身の若者がそれまで生きていなかった。それまでに半数がやせ細って、顔は一様にガイコツ面になって文字通り骨と皮ばかりになる。そして死んでいく。現役兵の集団だったのがたちまち病人の群れと化した。最初の甘藷の収穫まで生き残れなかったのだ。

小野田少尉は米週刊誌記者の「いま米国ならびに米国人をどうおもっているか」との質問に、こう答えている。日本に生まれたから米国人とたたかった。もし、米国に生まれたら日本と戦っただろう、と。庶民は生まれた祖国のためには命をささげなければならなかった。平和の世の中では想像もできない現実がそこにあった。

戦後体験記

栗原 森尾イツ 86歳

渡満して一年目終戦の時待望の妊娠八ヶ月目だった。隣組の回覧板で墮胎する由伝えが来たが、願っていた子供の授かった喜びにおろす考えはなかった。然し翌日から突然の混乱が起こった。破れる様な玄関を叩く音に何事かと明けるとドカドカ土足で十人位の銃を持った服装もバラバラのロシヤ人がわめきながら部屋に入り押入からダンスからひっくり返して、各々持てるだけかついで引上げていった。只々恐ろしさに隅にうづくまって息をのんでいた。目をとじ「落ちついて落ちついて」云いきかせて両手を合わせていた。その日から毎日、二三度は侵入して来た。「殺される」「今日は殺される」と云う思いが日益しに強くなり夜も昼もウツラウツラ食も通らなかった。回覧板は毎日まわって来た。〇〇病院に火がかけられた。〇〇工場の人々は自

決した等の知らせに今日一日は生きのびられた。今日一日は生きのびられる様合掌しつつ過ごした。男は狩出される由、夫は天井裏に上がったままだった。侵入しても物がなくなって暫くホットした日がつづいた。ハルピンに侵入した兵は殆ど囚人兵で入れ墨していた。時計や鏡など初めて見るのか銃で打っていた。九月半ば、マジヤコは危険が多いので中央街に立ちのく様回覧板が来た。割合大きい家に二人ぐらしだからロシヤ軍が駐屯するかもと白系ロシヤの大家さんが知らせたので明日にでも地段街の親類の家へ越す様考えていた時だった。九月も半ば、もう寒かった。何日振りか六人のロシヤ兵が侵入してきた。いつもの兵より服装も立派だし一人の通訳がいた。私に奥の部屋に入れと云った。私はハヤ、駐屯する話に来たのだな、または金の無心かなと思って銃を向けられて奥の部屋に入った通訳と兵隊たちは大声でしゃべっていた。私は駐屯の事は云わないので、持っていた金を出した。すると一人の兵隊を残して、五人は金を取って部屋を出た。残った兵隊は銃を私に向けて何やら叫んだ。まだ、金を持っていると思っているなと思って手をふって「もうない」と叫んだ。一ヶ月余りの侵入で言葉は通じないまでもいづらか気持ちがくみ取れ、危険もうすらいでいたが突然銃をむけた「金はない金はない」と私は手をふって叫んだ。すると兵は腰のベルトをはずし出した。私は頭に血が上がった。回覧板で〇〇地で強姦された。〇〇地でも強姦されたと云うのは知らされていたが、九ヶ月の身重は誰の目にもわかるそんな目になる事は決してないと思っていたが今ズボン迄脱ぎかかっている兵隊、

「私には子供が子供が死んでやる」と叫ぶと銃にむかって、ぶつかって行った。弾はすざましい音で天井を打った。狂った私は「殺せ殺せ」とわめいて又銃にぶつかって行った。その時入口を叩く音がして兵隊は入口に向かった。咄嗟に反対の小窓から飛び下り隣の白系ロシヤ人の家へ逃げこんだ。いつも仲よくしている大家が危険を感じロシヤ憲兵に通報されていた由、私は助かった。収容所ぐらしの中、石炭も炊けない北満の一室で10月11日、元気な産声を上げた男の子を産み落した。が五時間後には泣き声もだんだん細まり凍死した。冷たくなった堅くなった骨を一晚中抱きしめて泣きつづけた。12月に引揚げた。精も魂もつきはて虚ろになって一年過ごした時、医師から妊娠を告げられた。活を入れられた様、体の血がわき上がった。長女を授かり三年目に次女も授かった。然し二人が小学生になった時、大洪水にあい、夫と店を失った。五十歳になっていた。銭湯に行けないほど体中瘧だらけになって自転車に乗り習い衣類の行商を始めた。行商もなかなか思うようにならずつまづいて敗戦後の苦しみを思い返し、奮起しては立上りして過ごした。

二人は成長した。

戦後五十年になる。私も八十半ばをすぎた。私は今極楽の境地である。一人住まいであるが毎日娘は電話をくれるしマアママ健康で青い空を眺めては深呼吸し、花にしゃべりかけては水をやるし、好きな食物を作っては食べ、毎晩お風呂に入っては「お風呂さん有難う」と云う。風呂の中ではドラ声上げて三曲ぐらいは歌い「まあ隣のバア様ボケタカナ」と思われはしないかなと一人ではくそ笑んでいる。

毎月11日には仏壇にお供物を作って上げる。一年一年成長して行く姿を描いている。もう五十歳になるので白髪まじりのおじさんだろうなどと思う。抱きしめた我が子がだんだん泣き声が細まり冷たくなるのをどうしようもなかった事、収容所で次々に死んでいった人々を野犬の死骸の様にトラックにつみこんで行った事。忘れる事のできない、戦争さえなかったら決して戦争はしてはいけない。戦前、夫を息子を戦地に送った女の人々、子や孫に戦争の悲惨さを話伝えねばと思う。私が生きてる間には戦争をなくする事ができなくても次の世代又次の次の世代でも実現する事を願ってやみません。世界の各々の国が人が我欲を捨てて笑って青空を眺め、美しい草花を眺める自然の心を楽しさを味わう事を知ったら戦争はなくなると思う。

戦後を生きる

野火止 高石定雄 76歳

私は昭和18年4月満州第3642部隊を三年四ヶ月の軍隊生活を終えて現地除隊し、国策を添うて故郷北海道北見へ帰り家財を整理し、妻を娶り母と甥（3歳）一家4名満州大連市へ移住した。

株式会社大連機械製作所（満鉄鉄道車輛製作）に就職し、ただ戦争に勝つ為、増産、又増産の日々を重ねて居た。

昭和20年ソ連軍の参戦8月15日の終戦、ソ連軍の満州へ関東州へと、怒涛の様に侵入して来て大連市も暗黒の街と化していった。こうした中、3月生まれの長女を11月にソ連兵の婦女暴行で亡くし、その後、生きんが為ソ連軍艦改造や中共軍木帆船改造等で細々と生計を立てていたが3度に渡り中国人の強盗に会い、かろうじて、昭和22年3月末、長男4ヵ月妻母甥6歳の一家5名裸同様の身なりで大連港より引揚げ船で佐世保に上陸故郷北見市へ帰国した。引揚げ後、病床に就いた母も翌年この世を去る。

引揚げ者の私共には家もなく、甥を姉に戻し、義父のもとに間借りし就職

に努力したが市役所も故郷の人も力にならず、共産員あつかいで鍛冶職人の私はやっとの事、吹子金床小道具など買い求め、市内の坂田や長山車工場の片隅を借りて、馬車の金物作りや南二条の市内や排牛内での農鍛冶営業はこの外、きびしく次男、次女出産後は、農家の人々と顔なじみになると、秋の収穫迄貸して、秋になると不作で来年の秋迄と仕事をしていても実にならず。子供三人の将来を考え、4年有余の農鍛冶生活に見切りを付けて廃業する。

昭和27年1月伝手を求めて、炭鉱へ、(釧路白糠町庶路)明治鉱業庶路炭鉱。坑内修理(内修)に就職。家族5名二階住宅に入居。炭住生活にも慣れていった。六千人余りの炭鉱労働者は一番方、二番方、三番方と24時間休む事なく、採炭は続き、日本産業再建へと頑張って居た。私達内修班は、午前中は坑内に入り地下千八米の四片五片へと吸排管や排水管の延長取付作業で、午後は坑外で先輩技術者と共に翌日の配管曲げや段取りをした。鍛冶職の私は坑内夫が徒歩に使う、ピックルを作り坑員にも喜ばれた。炭坑労組のストライキには保安要員として。ただ一人暗黒の坑内に入り、ポンプ室から下のポンプ室へ掛け持ちで排水に務めたこともある。昭和28年十勝沖霧多布大地震には坑内に居て地盤よりバラバラ降る炭塵の中、ただ一人坑内よりはい出して来た。命運の強い男だと思う。

七月国策として全国的炭坑の人員整理の波が押し寄せ、指名解雇者が大勢出たが炭坑歴の浅い私は、進んで希望退職し、1年7ヵ月の炭坑生活に終止符を打つ。

夫婦は小学生一年生を頭に子供三人をつれ東京へ東京へと人生への再起をかけて行った。私は35歳だった。



あれから五十年

野寺 谷口定利 67歳

今、こうやって手記を綴れるのもあの終戦の日、天皇のラジオ放送があったからである。

茨城県鉾田の特攻隊基地、その日はとても暑い日であった。「ピーピーガーガー」から聞き取れた玉音は勿論始めて、然し戦争は終わった。負けた。とのことは聞こえた、「良かった。これで家に帰れる。」偽らざる実感だった。

陸軍特別幹部候補生、陸軍兵長、航空整備士の肩書で満16歳、前年の8月千葉県柏の航空教育隊に入隊の満一年生兵であった。近眼の為パイロットにはなれず爆弾を投下する電気系統の仕事だった。しかし、特攻機が双発機だった為パイロットの他に通信と整備の三人が定員、この飛行機も整備も終えあと一週間で片道分の燃料だけで発進が決定していた。遺髪も準備済み、まさに間一髪、幾多の戦友に続き太平洋の露と消える運命にあったのである。靖国神社の入口まで行っていたのだ。人の運命は解からないものだ。

北海道の函館生まれ、小学校、中学校と進んだ私も、所詮は大きな時の流れに含み込まれた一人にしか過ぎなかった。早く軍人になり国家の楯になれば、海軍兵学校、陸軍士官学校へと学窓を飛立つ同輩に何とかして追いつかねばと思っていた。「未だ若いし早いのではないの」との母の言葉をよそに。

「コナルカロフニレコニフ」視力検査表右一行の文字を暗記し（左に一行移って失敗したが）口ひげの尉官殿から「合格」を告げられ、「ありがとうございます御座居ます」と最敬礼したことが今でも思い浮かばれる。

近所の方々に「父と母、弟達をよろしく、死んで帰ります。」との挨拶をし、歓呼の声、旗の波に送られ函館棧橋駅を去る時、人の影で目頭を抑えていた母の姿は今も忘れない。

生まれて初めての連絡船、津軽海峡の漁火、太い竹林、畑に見えるサツマイモ、内地は異郷の光景だった。長いスシ詰めの汽車は殆んどが網棚の上で過ごした、長い旅だった。

昭和19年3月10日、東京大空襲の夜、私は隊の表門の衛兵として立哨警戒中であった。玄関の番兵である。遥か東の空が一晩中赤々と燃え続けていた。あの炎の下で何十万という人が死の彷徨をしていたのだ。今でも目に焼きついている。悲しく辛い思い出だ。

教育隊時代の日記が奇しくも残っている。毎日毎日の壕掘りが続く、腹をすかし、遠く故郷を想い、消灯ラッパに涙したことも今は懐かしい。田中村

だったと思うがその地に戦後訪れたことがある。勿論跡形もなく造成された土地には新興住宅が建ち並び、戦争を知らない世代の家族が一杯だった。

「これでいいんだ」と路傍の石を持ち帰り飾り棚の隅に置いてある。同期の殆どが半年の教育を終え満州に続々と転進して行った。完全軍装し隊列を組み軍靴の音も高く去っていった。その道路の石であったのかも知れない。

鉾田の特攻隊跡にも戦友会として訪ねる機会があった、大洗町となってる。驚くことに当時の木の門柱が朽ちて残り立っていた。誰かが建てたのか石碑があり、若くして散った特攻戦士の名が刻まれたものだった。

「お母さん助けて」私は必死に滑走路を走った、後ろからアメリカグラマン艦載機が機関砲を射ちながら追って来る。終戦で武装解除をさせられ、銃器のまとめをしている時イタズラ掃射を受けたのだ。超低空、地上スレスレ、パイロットの顔が見える若い一人乗り、笑いながらである。危うく一命を失うところだった、しかし寿命があったのか助かった。

8月末、柏－水戸－青森と敗戦の焦土を通り抜け次の原爆予定市とも云われた故郷函館に使い古しの飛行服に白絹のマフラー姿で戻った時両親の驚きのまなざし、今も忘れない。その父も今は他界、母は九十歳を越えるが元気で居るのが嬉しい。中学に復学し、地元の水産専門学校に編入学して人生が決められた。北海道内でのさけます孵化場、十和田湖でのヒメマス孵化場を経て東京に来て農水省、水産団体の職も終え新座に住んで20年になった。只の人となってから未だ2年余りだが残り人生を有意義の日々にしたいと考えている。

戦争を体験した一人として何と云っても二度と戦争はすべきでない。戦争を知らない世代がこれからの日本を背負うのは明らかなのだ。「老兵は死なずただ消え去るのみ」の言葉を思い起こし、老齢社会人としての余生を過ごしたいと考えている。

青春八十年

野火止 嶋根守次 84歳

私は今日までの生涯を通して、どこにあっても、見るもの、聞くもの、触れるもの、一つとして私を教え、裨益しないものは無かった。これを私は心の巣と言っています。鳥は木に巣をかけ、猪は荒野に巣を作るように、人間も色々な自分の巣－（家）－に住む。人間だけはその他にまた目に見えない巣－（世界）－を心の中に建設する。人間は神の貴重な創造物であった。

第二次世界大戦中、ジャワ島スマラン市で中部陸輸局に私が軍属として配属されて、総務部庶務課に勤務中、現地の女性ヌ・ラウトも同室で働いていた。

1944年（昭和19年）、戦局も陰しく7月に、戦争の最高責任者東条首相の辞職あり、9月には小磯首相のインドネシア共和国へ独立供与の宣言があり、10月には現地の邦人や軍属の現地召集があった。

その頃、課長から「嶋根君はこの度、第16軍（ジャワ島占領軍）司令部付になって、スカルノ（後に初代大統領）専属の仕事に移ることになるだろう。」と言われ、私は即座に「そんな重責には応える能力はありません」と申し上げたところ、この話は立ち消えになってしまったように感じられた。終戦引揚げ後、私の軍籍簿を調べると「1944年（昭和19年）10月軍司令部へ転属」となっていた。

また、それと前後して、スマランーソロ間の列車が正面衝突する大事故が起こった。その後何ヶ月か過ぎると色々な謀略説も消え、世間の話題にもならなくなった頃のことだった。

日本軍の憲兵が大理石の床を踏む靴音を高らかに、私の部屋に堂々と入って私の前を通り過ぎて、奥の庶務課長と小声で話していた。

私は列車衝突事故の調査かと思っていたが、その時、ヌ・ラウトは課長のわきの局長室への通路に立っていて、いつもとは違う目くばせを私にしている。私は異常なものを感じ、彼等の話題は私の件であろうと気付いた。この時、初めて緊張し憲兵の恐怖を体験した。以来、絶えず警戒心をもって我が身を守ることを覚えた。

それから翌々日であった。運輸部長室の女子事務員で、当時存在の珍しい華僑とインドネシア国人の混血女性ティックの人物調査を命じられて尋問したが、何を聞いても「私は知りません」を繰り返すだけで成果は何もない。そのとき、ふと「これは私の身上調査ではないか」とヌ・ラウトの目くばせを思い浮かべた。

課長への報告書は表面ティックの調査書だが、それとなく自分の立場や考え方など苦心して書き上げた。それ以来、憲兵は来なくなったが、後々まで不気味であった。

あの8月15日正午、全邦人職員が広い一室に集合してラジオで敗戦の詔勅を聞いた。

その後、唯の一回、中庭で全員の前で局長の訓示を通訳したが、それ以外

敗戦を語ることは出来なかった。

ヌ・ラウトにも語れないし、彼女も困惑の様子で何も語らない。

8月17日には、インドネシア共和国の独立宣言があった。その後、局のマル秘書類を全部集めて一括焼却する時、局長の机の浅い大きな引き出しから、私の苦心して書いた。ティックの調査報告書が目止まって驚いた。

二日間にわたる炎を眺めて、敵さんを一度も見ることがない自分は、ようやく敗戦の実感と憲兵の恐怖から解放された喜びなど複雑な思いであった。

8月25日には現地で軍属解除となり、それ以来、出勤もせず「我独り大地に立つ」の寂寞の感と共に、神共にいまして我が道を守れと祈るのであった。

政局は騒々しく、連合軍の名のもとに、旧主権国オランダ軍の上陸が予想され、各地に独立！独立！（メルデカ！メルデカ！）の叫びが起る。

10月14日、身辺整理をして、小さいリュックに最小限の必需品を入れ、残りは全部二個のトランクに入れてヌ・ラウトの留守宅へ届けて、午後独り市外バスで約百キロ離れたテマングンの邦人キャンプの建設参加のため出発した。キャンプに着いたのは、たそがれ時で、隊長への申告は翌朝にしようと思いつく。

数時間うたた寝すると翌朝15日未明、スマラン事件が勃発した。危ういところで死線を脱出していたと、気付いたのは数日後であった。

ヌ・ラウトとは終戦直後、無言の一別以来、幾度かの死線を越えた。

1992年インドネシア語の自分史を現地で出版したのが縁で、音信もなく、生死も不明の彼女と文通が出来た。

以来、会いたい、見たいと発起したが、愛する妻の思い過ぎしの心情を考えて3年余り、言葉にも行動にも気を配り忍んできたが、時至って本年（1995年）5月10日、いつもの様に妻を伴ってインドネシア共和国を訪れた。

5月18日いよいよ胸をふくらませて、彼女の住むスマラン市で探したが、彼女には会えず、その次男に会ったが「母は長男家族と従来のに住んでいたが、長男夫婦が突然、交通事故で兩人とも即死し、残された子供二人は今、私が引き取っている。母は長女の嫁ぎ先の家族とスマトラにいたが、最近転任でバンドンに引越した」と聞かされた。3年前に届いた幸福そうな便りから、打って変わった不幸に襲われたと知った。

10年前に夫に先立たれ、今75歳になるだろう、同情に堪えない。旅の予定を変えて、ジャワ島バリ島を廻ってからバンドンへ行くことにした。

5月28日早朝、ジャカルタ、ガンビル駅では発車時刻を聞き違えて一時間半も待つ。妻は「スマランと同様に矢張り、彼女とは縁がないのね！」バンドン行きを中止しましょうよと誘う気持ちを無視して、待っていて良かった。

展望車の中では、待ち疲れて話すことも少なく、目を閉じて50年振りの出逢いを心に浮かべていた。バンドン駅で少し早い昼食をすませ、タクシーに住所メモを渡して乗り込んだ。郊外の新興住宅街の一角で、外から声をかけた。

現れたのは、若夫人と子供二人「あら！嶋根さんだ！」奥にいる母親のヌ・ラウトに知らせるように大きい声だった。珍しく私の四角い顔が物言うのであろう。初対面であり、勿論私とは血のつながりがあるわけではないが、親しそうな声をかけて握手。次に奥から出てきたのがヌ・ラウトであった。「嶋根さーん！」と日本語で親しみを込めていた。私は妻を紹介した。妻の立ち会う50年振りの再会に、互いに何のわだかまりもない。昔の私の片思いの彼女であったことは前に書いた通り。

彼女は前に頂いた写真に比べて、急に老けたようである。

妻は「もっと若く美しい人と思っていたが……」とささやく。安心した様である。顔も体も太くなって糖尿病にかかっていた。

見るからに活気がなく、家庭の破壊から来る心労もさぞかしと思われる。話すことも少なく、娘には母親の昔の面影が見えて、その代弁をするようであった。

応接間正面の額縁が目をはく。数行の金色のアラビア文字は私には読めないが、コーランの言葉であろう。隣の広間は祈祷室をかねて、祈りのときに使う敷物が折たたんで隅に片付けてあった。敬けんな家庭であろう。

この応接間の正面にある三人用ソファの中央に私が一人、妻は何故か私の側に来ないで別の左の椅子に着く。彼女はそれを見てか、やはり右の別の椅子に座った。若夫人は別に椅子を持ち込んで、私とテーブルを中心に対面している。可愛いひ孫サラが此处にいたら、話が出来なくても空席を叩いて、ここへおいでと求めるところであるが、今の私には言葉にも手振りでも私のそばの席につくように勧めることが何故か出来ない。

この女性二人が私の傍らにすれば、空気が落ち着くのに、互いに距離をおいて均衡を保つことに、余計な神経を使っているように思われる。予想に反して、どことなく白々しい。彼女とは友愛で結ばれ、妻とは夫婦愛で結ばれている。愛に差異はないものを…。妻にはやきもち、彼女には妻への遠慮が

あるのかもしれない。とにかく、なんとなく全員が緊張気味である。彼女は妻に「若くて美しいですね」また私には「若くて忠実な奥様で幸せですね」。私はスマランでの昔の思い出を語ったが、語りつくせない。今日ここに出会えて幸せですとは言えなかった。彼女の今の苦勞を案じるからである。

若夫人は母の代弁をするように賑やかによく話をする。この才たけた女性は母親の若い頃を忍ばせる。唯、この家のご主人とはお目にかかれなないので、どんな人かわからないが、彼女はこの自分の娘とは心の通う打ち解けた日々を暮らしているのだろう。

帰るとき大きい孫が駅へ先行して一等切符を買って待っていた。その代金はどうしても受け取ってくれなかった。

この家をいとまごいをするときに記念写真をとる。初め二人の小さい孫を間に入れてヌ・ラウトは私と並んで皆で撮った。次に気のきいた若夫人の注文で、彼女と妻が初めて私を挟んで撮る。終わりに若夫人の運転で全員、駅まで送ってくれた。

待合室では今度こそ最後とばかり若夫人も入って、緊張気分も急に和らいで四人の体も身近に感じて面白く撮れた。そのとき列車がホームに入り、立ち上がると自然に何の抵抗もなく、彼女の肩に初めて、両手をかけてしまった。彼女も身を私の胸に任せていた。

言葉には尽くせない五十年の友情へのお礼を、体実感として表わせたのだった。彼女との出会いから五十余年にして初めての体感であった。彼女はどうかののだろう。尋ねるまでもない。この別れの一時は値千金。

戦前は店の客とでも挨拶といえば握手は付きものであった。戦中になると、こちらは戦勝国で軍装しているし、誇らしげに日本軍人らしく挙手の礼であったので、思えば彼女とも握手をした記憶もない。それなのに何故か、新しい戦後の風潮か、いや、この瞬間が最後かもしれないと差し迫る気持ちがそうさせたのであった。両手をかけてしまったのであった。

いつ、いかなる時でも愛は地上の花である。美しい。

この花は五十年にして一度、初めて咲いた珍しい花であった。戦争の片隅で小さくなっていた男の美しい花でもあった。五十余年の憎しみ、争い、嫉妬、恐怖、忍耐、不信、戦争、敗戦、独立戦争、引揚げ、困苦なども共にこの花の周りの土壌をなしていたのだった。

プラットホームは、日本と違い、低いので地面から相当の段差がある。若い人でないと客車に足をかけられないほどである。見送る人が客車のそばに

たっているは見えない。展望車で窓を開けられず、私は雨漏りでぬれている客席のことに気をとられているうちに、別れのつらさもなく、気付いて出口に立っても、早、誰も見えなかった。彼女はどんな顔で立っていただろう。家族の皆さん、さようなら。

あ〜バンドン駅よ、さようなら。間もなく雨漏りは烈しく、車中を見渡しても空席はない。しばらくして雨は止んで雨漏りもなくなつて、車掌が持ってきてくれたバンダル（枕）を座席にのせて、やっと人並みに席に着いた。隣席の妻は静かに落ち着いていた。何を考えているのだろう。緊張の後の緩みであろうか。

数日後、5月30日に帰宅してからの私の手記を読んだ妻は、バンドン駅の彼女との出来事を初めて知って「私は何も知らなかった」。

「私は隠れていたわけではない。君が知らなかったとは私も知らなかった。」怒りも翌日まで続くようでは哀れであるが、せいぜい当日限りまでだと、可愛さが返って来る。

あの一等車は珍しかった。無蓋貨車ならいざ知らず。これは私の頭を冷せとの神の声であろうか。

神よ いつも、み声を聞かせて下さい。

東京大空襲に地獄をみた

池田 木村光雄 70歳

3月10日、今年も、来年も、その次の年も3月10日はやって来る、忘れ去ろうとしても忘れる事のできない、生きている限りやって来る私の3月10日。

当時、戦況は益々不利となり、学生の徴兵延期は、理工科系のみとなった。神宮外苑での学徒出陣壮行式に先輩を送り出すと、学内にも、海軍予備学生や陸軍特別甲種幹部候補生を志願する者が増えた。

夏休み期間中は、東京在住の学生で編成した勤労働員に狩りだされ、日光の山中で陸軍被服廠の仕事をし、9月始め二学期の授業のため東京にもどった。

授業が始まって間もなく、今度は全学生が石川島造船所へ学徒勤労働員で行くことになり、日本大学・国学院大学・拓殖大学の学生約三千人が、須崎の遊廓で合宿することになった。大門の柱には、「石川島造船所須崎集団本部」と真新しい大きな看板が掲げられていた。

秋も深まり、入学通知（特甲幹）が先か、現役入隊が先か待っている頃、集団生活をしていた学生の間にも、不安と苛立ちから争いが目立ち始めた。

また丁度その頃、中野正剛の反東条運動や近衛文麿の反戦の動き等あり、学生の中に関係する者もあり、軍部の命令だったのか須崎での合宿は解散された。そして、自宅・下宿・学生寮から造船所へ通勤することになった。

私は、それまで寮生15名程の小さな研究会の学生寮に生活していたが学徒出陣や勤労動員で寮生が減り、我々が最後になり、寮を整理してしまった。戻る家も無く、同じ寮に居た千葉県出身の学友と二人で須崎に下宿を探し、佃島の造船所に通うことにした。

その頃は、もう毎晩空襲警報のサイレンが鳴り、慣れっこになっていた私たちは、昼の仕事の疲れもあり、起き出すこともなく寝床の中で夢現で聞いていた。

3月8日は雪が降り、9日は寒さに震えながら凍った道を造船所のある佃島まで歩いた。

その夜も空襲警報のサイレンが鳴った。何故かその夜は表通りが騒がしかった。その時突然大声で「学生さん、今日のは、何時ものと違う、早く起きて」と階段の下から起された。

学友と二人一緒に飛び起きて驚いた。夜中だというのに部屋が明るくなっていた。障子を開けて表通りを見ると広い通りには、お祭りの大群衆のように大勢の人が右往左往していた。西の方に火の手があがり火の明かりで人々の顔がはっきり見えた。

学友と二人階段を駆け降りると下には家主家族は誰も居なかった。表通りに出て、さてどっちに逃げようかと考える暇もなく群衆の渦に巻き込まれてしまった。

須崎弁天町は遊廓の町でした。周囲が堀と海、東側の地続きには高い万年塀が行く手を阻んでおり、廓の外へ逃げ出すには北の大門大橋と西の小さな橋だけしかありません。

そのうち群衆の渦は西の方へ流れだした、二百メートル程走った時大混乱が起った。西の橋は既に火の海で渡れないと叫びながら走って来る群衆と入り混じり、群衆は更に膨れ上がり、西の大門大橋へ流れだした。その時、須崎に来てから何かとお世話になった、布施さん一家に逢った。年老いた両親と兄弟姉妹の六人が揃って一緒に連れてってくれと言う、私は学友と別れ布施さん一家と行動を共にした。しかし、既に大門大橋も火に包まれて群衆は東京湾へ追い詰められた。その頃には間断なく降り注ぐB29の焼夷弾

により豪華な二階建ての建物が並んだ街並みも強風に煽られ燃えだしていた。

岸壁に殺到した群衆は我先にと、蝗（いなご）のように海に飛び込んでいった。

私は、海に飛び込む以外助かる道はないと、布施さん一家を説得したが「此处まで連れてきて貰い有難う、年寄りと女では泳げない、章（長男都立三商の五年生）を頼む」と押し問答しているうち炎が岸壁に襲いかかり私は海へ吹き飛ばされた。

木場の海には丸太材が浮いていた。私も木材まで泳ごうとしたが大勢の人で泳ぐことが出来ず、諦めて岸壁の真下まで戻った。その時立ち泳ぎをしていた足が海底についた。岸壁に沿って人が一列に並ぶことの出来る足幅だけの範囲だった。火は強風に煽られ、炎が激しく海面を舐め始めると木材につかまり海面を埋め尽くしていた人々は、一瞬のうちに頭を焼かれ浮き上がってしまった。ほんの二～三分間の出来事だった。海面は死体で埋め尽くされ、炎は浮死体を舐めていた。私は岸壁にへばりつき、腰の手拭いで顔を覆い海水を被り、防空頭巾についた火を消した。

岸壁にへばりついていてた人たちも何人かは、力尽きて、海面を埋め尽くした死体のなかへ流されていった。

燃える物は全て燃え尽くし、辺りは急に暗くなり、満潮で首近くまで上がった水面が下がり始めた。空には透き通るような銀色のB29が編隊で砂町の東京汽車会社辺りに焼夷弾を落していた。入隊を目前に控え、あの敵機に一発の銃弾も打ち込めず、此处で死んでたまるか、との思いで必死に頑張った。

夜が明け、ぼんやり辺りが見えはじめ、一列に並んで生き残った十数名が助け合い岸壁によじ登った。

岸壁に立ち街を見て、また驚いた、そこには昨夜の数時間前までの面影は全く無く、地上もまた地獄の世界だった。あの豪華だった建物の軒並みも、賑やかだった人並みも、すべて消え失せ、物音一つせず、不気味な静寂のなかに、黒焦げの死体だけが累々と横たわっていた…。

私の記憶

本多 渡辺富美子 80歳

今は立派な新座市ですが私がここに来た時は片山村でした。昭和15年です。

外灯一つなく月の出ない夜は鼻をつままれてもわからないくらい真っ暗でした。16年12月8日に戦争が始まりました。不安な日が続きました。役所から赤紙が来ると、その家へ行き、お国のために頑張ってきて下さい。組合の人にバンザイバンザイと元気に送られて行きました。生活物資は配給制度になり、お米は少なく代用食といい、大豆やとうもろこしの粉、コッペパン、その他味噌醤油、何でも少々、大ぜいの子供さんのいる家ではとても足りないでしょう。家では、子供は一人だったのでなんとかやりくりできました。何でこんな小さな村まで襲うのかと思いました。

17年18年と警報のサイレンがなり、家でも子供が生まれ、親子四人になり、配給だけでは足りないので食料を買いためました。近所の人が皆よい人なので助かりました。

19年頃になるとますます警戒警報が烈しくなり、家の裏の隅に防空壕を作りました。赤紙がきても派手に送られず、知らない間に行ってしまうようになりました。その内、アメリカの兵が沖縄に上陸したので、これは大変だ。本土まで来るのか。それからは空襲がひどくなり、日中は防空壕へ入り、夜は電気に黒い布でおおい、収まるのを待ちました。解除の声がするとほっとしました。B29という大きな飛行機が飛んでくるし、小さな飛行機は30、40とまとまって飛んできました。下の方へ飛んできて一斉射撃をします。女の人はバケツリレーや男の人は竹槍を作っていました。人のうわさで防空壕へ逃げても入り口へバクダンが落ちて、中の人みんな死んでしまったとか、もう、どこへ逃げてもだめ、こうなったら警報が鳴っても防空壕へは入らず家の隅に親子四人でかたまって、どうせ死ぬなら一カ所で死のうと心で決めました。解除といわれ、ああ今日も生きていたかと思いました。

ある夜警報が鳴ったとき、戸のすき間から外が明るく見えました。外へ出てみてびっくりしました。まるで昼間のように明るく、風船の大きいものが空一杯に浮かんでいて、あちこちの家が遠くの方まで見え、これで飛行機が飛んできたらみんな死んでしまう。何と恐ろしいことだ。後で聞いたら照明弾というものだそうです。

いよいよ空襲警報が烈しくなり、3月頃東京の空が赤くなり、夜になるともっと真っ赤に燃えるように見えました。ああ空襲にやられたなと思いました。

た。

長崎、広島など原子爆弾という恐ろしいものだそうで、多くの人がなくなっただけです。

二度と戦争なんかいやです。今思えば夢のようです。戦争は昭和20年8月15日に終わりました。でも、食糧事情が悪く、何か欲しいものがあったっても買えず、あまり知った人もいません。親切な人がいて、教えてくれました。あのおばさんに何か頼むといいといわれ、まず一番に腕時計をはなしました。私の欲しいものをすぐみつけ持ってきてくれました。私は着物をこわし、ふとんを作りました。食物がいろいろ欲しいときは着物を持って行って、買いました。主人にまた買えるようになったら買ってやるからと言われ、竹の子生活が始まりました。足袋なども教わって縫ったり、かつぼう着はつぎだらけ、買いたくても買うこともできず、子供が学校へ行くのにカバンの代わりに袋を縫い、それを下げて行ったものです。なにしろ、お金があっても1月に幾らと決まっておるのです。そのお金も全部お国にさしだし、月々おろせば、何時かは無くなってしまふ。そこで私は隣のおばあさんに子供を預け、草むしりに行き、じゃがいもや大根などをもらって来ました。また、私は縫物ができたため、子供さんのおうぜいいるおばあさんの家と仲良しだったので、着物を縫い、腰あげ、肩あげをしてすぐ着られるようにしてあげたからとても助かると喜んでいろいろな野菜を下さいました。なにしろお米が少々なので、いろいろな野菜を加え、いつも五目めし。たまにはさっぱりした米が食べたいと思いました。

今はもったいないような世の中です。私も長生きしたお陰で楽しい生き甲斐のある日々を送っています。すぐ八十歳です。

平和がいつまでもいつまでも続きますよう。

戦時下の少女体験記

野火止 石山光恵

ふと空を見上げた。青空に白線をのこしながら飛び去り行く飛行機を見、遠い夢のような昔が脳裏に甦ってくる。キラリと輝く小さな機体。もうとくに忘却している筈の少女時代の記憶が現実化してくる。

定かではないが小学四年の12月だった。想像もつかない大国アメリカとの止むに止まれぬ戦争が始まったと云う大人達の声、小学生の私には何のことやらわからない。とにかく大変なことだとは感じた。

大和田町の隅っこに住む私の家には電気というものが無く、薄暗いランプが三つ灯っている生活だ。到底ラジオなどと云うものもない。新聞と父が大切にしている小さな鋼石ラジオを毎夜父が耳に当てニュースを聞いていた。終戦を告げる陛下のお言葉も耳にする事が出来ずに。

大東亜戦争と名のつく大きな戦さ。四年生の私には事の重大さを理解することは、とっても無理。大人達の話のみを信じて、小学校から国民学校へと名前が変えられた。そして、私達にも戦争の影響が出始め、物が不足してきて自給自足の生活が始まった。

目ぼしい品物は軍需へと廻された。履物もない年に二回位各クラスに、三、四足のズック靴が配給され、ジャンケンやクジ引きで買うことが出来た。

木枯らしが吹き霜柱の立った校庭での朝礼、裸足のままで指とカカトで立って校長先生の話の聞く。寒さでちぢむ手の指先、見廻りの先生の平手がとんでくる「ピシヤリ」。

霜柱の立つ校庭に砂を敷くために三年生以上位の生徒は家から持ってきた麻袋を持って大和田小学校から柳瀬川まで砂取りに行き、水のたれる袋を肩に一日に二往復して、その砂を広い校庭のぬかった所に撒いた。どんな事でも自分達でやった。

裸足で登校したり、父が作ってくれたワラジをはいたりもした。砂利道農道と、夏は足の裏が焼けつく様だ。三、四年生以上からは、春から夏にかけて草刈りをした。種子のない雑草を夢中で取り、干しては、割り当てられた分量を校庭の隅にクラス毎に積み上げた。何のために使われたのか定かに覚えていない。

木枯らしが吹き始める頃になるとドングリ拾い、一人の目標が俵一俵だ。とてつもなく大変なことだと思った。これも日に干しては、持てるだけ抱えて学校に持っていく。三キロ位はあったであろう道中だ。学校から帰ると、とにかく夢中で林の中、平林寺の林へと薄暗くなった地面を手さぐりでドングリを拾った。軍に送る油の原料になるとのことだった。五年生以上位の生徒全員で集まったドングリの俵と農家から持ち寄ったリヤカー、荷車等に積み与野駅まで一日がかりで運んだ。ガタガタ道を荷車を引く子供の足にはとても大変なことだったが誰も不平を言うものはいない。私達の小さな力でもお国のためになるのだと。浦和の別所沼の処で休憩したことを今でも覚えている。

六年生の時クラス全員で慰問袋を作った。手作りの指人形、絵手紙、その他色々の物を入れて、先生と数人の代表者にて海軍省という処まで持って行

った。私達に出来る精一杯の真心だった。その頃は、南の方での戦果は上々の様だった。正義の戦争だから勝利は当たり前と思いこんでいたが、戦いの様子は日に日に厳しくなりつつ、警戒警報のサイレンが鳴り渡るようになり、ランプに黒い布を巻き灯がもれない様に、家族は無言で成り行きを待った。空襲警報が発令、敵機来襲の知らせだ。誰云うとなしに裏の竹藪の中に作った三畳ほどの防空壕へと急ぐ。子供心に身の危険を感じつつ。

隣町の朝霞には陸軍士官学校があり、軍需工場ありて何時爆撃されるか、恐ろしさは何時も頭の中にあった。太陽に照らされ白線を引きながら編隊を組んで我が上空を飛び去っていくB29。恐ろしい筈の爆撃機だがキラキラと輝いて綺麗だった。

その後、戦果は下り益々厳しさを増し、私達女生徒は軍需工場へと学徒動員され機関銃の弾作り、手なれぬ作業、初めて目にする実弾、国の為に私達の力が少しでも役に立てばと一生懸命だった。油の手を洗う石鹸もなく、又又空襲のサイレン。50名位の生徒達は一斉に頭巾をかぶり工場内の防空壕へと身を隠す。毎日がその繰り返し。学校での勉強なんて全然できず通信簿の点のつくべき処は白いまま。子供心にも運命ということがあるのだと。そんな中にも嬉しい出来事もあった。数人の者が社長さんから善行賞というものを頂いた。もう一つ戦時下の六年生の時、文部省朝日新聞協賛の健康優良児の表賞状だ。私の少女時代の大切な大切な宝物である。

3月10日の大空襲は恐ろしかった。野火止の空まで届く程に真っ赤に染まった夜空、夕焼け空のように、遂に東京は焼け野原と変わってしまった。大勢の人々が折り重なって亡くなったという。伯母や従兄弟達もその犠牲に。空から容赦なく攻め込まれ内地の人達に沢山の犠牲者が出たことを忘れることなく。開拓の花嫁として渡満した姉も幼子二人と共に自決したと風の便りに…。私14歳の夏だった。夢の様な50年前が。

60代を大切に生きたい。青春を取り戻すことが出来たらと…。

上海の終戦

新堀 松本哲哉 75歳

昭和20年8月13日、私は時ならぬ爆竹の轟音に眠りを覚まされた。まだ夜明け前、しかも爆発音は益々激しさを増し、その輪を拡げてゆくではないか。一体何が起こったと言うのだ。

中国の上海に生まれ育って25年、今どき爆竹を打ち鳴らして祝う行事な

どありもしない事は、百も承知だ。それなのに夜が明けても、爆竹の轟音は止む気配もない。

外に出て見る。中国語新聞の売り子が号外の束を抱え、「我々は勝った、日本は負けたのだ！」と大声に連呼しながらかけ廻っているのだ。日本が負けたって？号外を買って見る。そこには間違いもなく、日本政府はポツダム宣言を受諾し無条件降伏に応じた、と印刷されているではないか。慌てて家に戻り邦字新聞を開いてみる。戦争に関する報道は例の通りであるが、どこを探しても無条件降伏のコーの字も無い。

会社に出勤した。驚いたことに、道路に面した中国人の各家々に、更にはメインストリートの南京路の商店街に至るまで、いつの間に用意されたのか青天白日旗（当時の中国国旗）の波で埋め尽くされている。

中国人社員の話によると、昨夜のうちに日本無条件降伏の報が、手際よく中国人の全戸に口伝えに流され、未明の爆竹騒ぎを引き起こした模様である。

然し日本側からは何の発表もない。日本側の発表が無いのだから、我々日本人が日本の敗戦を認める筈もない。お互い半信半疑で仕事をする気にもなれない。勝ったのか、負けたのか、そんな中で金の取引相場だけは、一躍前日の数倍に跳ね上がってしまったのであった。

午後になって漸く日本軍から、中国語による立看板の布告が市内の要所に建てられた。即ち、未明の中国側の報道は全くのデマで、日本政府は降伏などしていないし、戦闘は続行されている。市民はこの様な事実無根のデマに躍らされ不穏な行動を起こす事は許されない行為であるし、この様に悪質なデマを流布する者は厳重に処罰する——等々という内容で、厳重に処罰するという事は中国人にとってそれが死刑以外の何ものでもない事は分かりきっている。この布告が出されると、早朝からの戦勝騒ぎはまるで嘘の様に治まり、青天白日旗は一斉に街から姿を消してしまい、何事も無かったかの様にいつもの上海の街のたたずまいに戻ってしまったのであった。そして跳ね上がった金相場まで一瞬にして前日の相場に逆戻りしてしまったのである。

8月15日、その日の上海も日本の8月15日同様快晴で暑かった。上海の暑さは日本の比ではない。もっと暑いのだ。その日私は所属している在郷軍人分会の勤労奉仕の当番にあたっており、集合場所に赴いたのだが指揮官から本日の勤労奉仕は中止と告げられた。理由は、本日は恐れ多くも天皇陛下御自らラジオを通じて、日本国民へ御詔勅をお下し賜るから、全員帰宅して漏れなく承る様にと言うのである。天皇の玉音放送は会社で同僚と一緒に聞いた。

然し当時ラジオの性能は現在の比ではなく、更に東京と上海という悪条件も重なり徒らに雑音のみ喧しく、結局陛下の放送の内容については、誰も確信を持って理解することが出来なかったのである。唯初めて耳にした陛下の御声、あの独特な異様に甲高い声質が、我々の想像していた陛下の御声とは余りにもかけ離れていた驚きの方が、より強く印象づけられたことを記憶している。

陛下のご放送内容は明確に分からなくとも、本土決戦一億総玉砕か、無条件降伏の二つに一つである事は間違いない。早速取引のあった海軍部へ社員を走らせた。海軍部内は殺気にも似た異常な熱気に包まれ、到底話など聞ける様な状態ではなかったが、漸く若い将校から聞き出した処によると、無条件降伏！そんな事は内地が勝手に決めた事だ。現地軍には現地軍の覚悟がある、と語気あらく言われたそうである。

天皇の放送は間違いなく無条件降伏を国民に訴えられたのである。予期していた事とはいえ、実際に敗戦が確実なものと分かるとやはり脱力感が身体を覆う。然し敗戦は口惜しいが、反面これでよかったとも思う。それは陸軍特にプロ将校連中の横暴に辟易していたからである。戦局がこれ程不利になっても、彼等の日常生活は放埒で傲慢、傍若無人ともいうべき態度で、万一勝利を得る様な事にでもなれば、どれ程威張り散らされるか考えただけでゾッとする。初めて経験する敗戦の未知の不安はあっても寧ろその方がマシだとすら思えてくるのである。それにしても、現地軍としての覚悟があるとは一体何を意味するのか。政府は降伏しても現地軍は戦い続けるというのか。一体我々はどうなると云うのだ。

然しとにかく戦争は終わったのだ。たとえ敗戦という形にしる。そして敗戦確定のその8月15日、上海はあの13日の大騒ぎとは裏腹に、まるで嘘の様に平静そのもので、普段の上海の街と全く変わりのない上海であった。

私の戦争体験

野寺 比嘉美佐 64歳

私は、当時の世界地図に朝鮮半島が赤く塗りつぶされていて、日本の植民地となっていた朝鮮の京城で生まれ、年齢も昔は、小学校から女学校へと受験して進学するその頃で、なにぶんにも子供であった。女学校の入試は、学科と口頭試問があつて、母が、「もし、口頭試問で大東亜戦争勃発の理由を聞かれたら、こう答えなさい」と、理由を教えてくれたことなどからしても。

ちょうどその頃だった。今考えると、朝鮮半島に爆弾投下をする筈がない。しかし、威嚇に過ぎないB29が、上空を飛び交い、授業中、サイレンが鳴るたび防空壕に避難し、身を守った。防空壕の中は真っ暗で、何かを探すため誰かがマッチを擦っているけれど、ついたと思うとすぐ消える。そんな時みんなは、この中は酸素がないと思いこみ、不安におちいったりもしたものだ。

当時の街の情景としては、塙や壁に大きなチャーチルとルーズベルトの顔が、撃滅という文字と共に、ポスターが貼られていた。町内では、毎日のように若者の出征兵士を日の丸の旗を手に手に持った町民が見送るのであるが、涙を見せてはいけな。出征はお国の為なので、嬉々としていなければならない。死を覚悟した人にみんなで笑顔を向ける。これが戦争中の日本全国民がマインドコントロールされた一つの姿勢だった。

私は、朝鮮民族が極貧で、日本人に対して従順であることから日本人に虐げられてる民族であるということの子供心に感知していた。当然の如く終戦の日を境に、今までの怒りが一気に吹き出すかのように我々日本人は虐待を受ける側となった。夜は電気をわざとつけなかった。あちこちの路地で、集団で暴動が明け方まで続く。灯りがついている家は「大きな顔するな」と、ドヤドヤッと入ってこられそうな気配があるのである。昼間見たプラカードには、日本人皆殺しと書いてあった。私は、子供心に、それまでの日本人の態度を思うと逆襲の怖さが身に沁みた。

そういう日々が二か月ほど過ぎたある日、祖国日本へ引き上げとなった。荷物は持てるだけ持ってよい。お金は持っているのが知れたら没収されるという。母は、布を裂き、紙幣を一本に何枚か巻き込み、縄状の紐を何本も作り、荷造りした物をそれで縛った。引き揚げに際し、駅の雑踏で見たのは、何処の誰も皆同じように一人で、首から肩から背中、両手と大きな荷物をさげていた。身体だけで良さそうな気もするが祖国に上陸してからの生活を思うからであろうか。汽車、それは人間が乗るのではなく、牛、馬、豚を乗せる貨車だった。無がい車であるため、トンネルを通過の時は、黒い煙が充満し、息苦しさは甚だしかった。人間、荷物、その上に又人間とギューギュー詰めなので、身体を動かす時、人様の頭であろうが顔であれ、靴で踏みつけるわけだが喧嘩もなく皆黙々としたものだった。少し走ると、朝鮮人の運転手は、運転を止め、乗客からお金を巻き上げるのである。それを何回となくされて、平和な時代に内地に往復した時は、釜山まで朝、出発すると夕方には着いたのだが、一週間もかかった。なにしろ低姿勢で運んでもらうほかな

かった。食べ物全く無い。もちろん、駅などに止めない。田園風景の処なのだが、朝鮮の主婦たちが、自分たちの食べた後の釜の底に焦げて、くっついていてところにお湯を入れ、それを売りに来るのである。それを買って食べてしのいだ。ようやく釜山到着。釜山港では、風の吹き荒む寒い埠頭で一夜を過ごし、関釜連絡船の乗船待ちをした。その間に、MPというアメリカ軍隊のポリスマンから一人一人に、シラミ防止のため、白い粉末を頭からかけられた。我々の前の船は、魚雷にあたって沈没したと情報がとぶ。しかし、それを耳にしながら、皆、黙々と乗船していった。翌朝、朝日の中で、遠くに陸を見た。それが日本、内地である。人々はそれぞれの表情に喜びの色が漂い、喜びと感動は隠しきれなかった。

茫々50年、その頃子供から大人へとさしかかる時だったので、私の原点でもあるようなこの時の記憶は絶対薄れていない。この50年の間に、戦後を苦勞した両親はもうこの世にはいない。死の数年前、年老いた父とこんな会話をしたことがあった。

「戦争は悲惨だ。奴ら不届き千万な野郎どもでね、あん畜生等、人間ではないと何度思ったことか。」

「何を言ってるんですか、そんなの偏見ですよ。人間はどの国の人も皆同じ」私は語調を強めて言った。父は、歴史的な時代背景とそのしがらみの中に生きて、何かを語りついでおきたいストーリーがあったのだろう。私が5年も早くこの世に生まれていたら、父と話を合わせることが出来たかもしれないと、ふと思った。私の戦争体験は主に引き上げの苦勞である。

ヒロシマへの祈り

片山 成島俊子

太平洋西部のマリアナ、テニアン島は日本から2,700キロも離れているということです。そこから飛び立った米軍のB29爆撃機が、1945年8月6日、朝8時15分に広島の上空で爆弾を落したのです。

東京で5月に空襲にあい、ひとまず私だけ実家のある広島へ帰っていました。

明治時代、日清日露の戦争のあった時、広島は近くに軍港「呉」を控えて大変重要なところで、明治26年に制定された大本營が広島に設けられ、明治天皇の行幸を仰いだところです。

軍事的に重要とされていたこの広島が今まで大きな空襲もないのはおかし

い、きっと何か起こるに違いないと云われていましたので、大部分の人は親戚や知人を頼って疎開を心がけたと思われます。

そのようなことで父と末の妹は疎開先からその日の朝、広島市内の我が家に出かけて行き、やっと玄関に入ったとたん、ピカッと閃光が射し、次は物凄い爆風、家は傾き帽子や靴はどこへとんだかわからぬまま、二人は裸足で飛び出しました。

町の中は倒れている人、そのまま動かぬ人、阿鼻叫喚のうちに家の倒壊、火災と相次ぐ中を父と妹は広島に駐屯していた「あかつき部隊」のトラックに救われ、命からがらやっと疎開先に帰れたのでした。

又もう一人、家の留守番にきてもらっていた親戚の者は庭の水まきをしていた時で薄着のため半身は火傷で、体が軒下にあった部分は難なしの状態です。生命は助かり、近くの比治山公園に逃れました。多勢の避難者で一杯だったということです。

最初この爆弾のことはさっぱり分からず新聞は発行されず二、三日経ってあの日落されたのはどうも原子爆弾というものらしい。世界でははじめて使われたと、本当やら、嘘やらさっぱり分からないような状態でした。

父や妹は運よく生命に別条なかったこと、どうやら家の中にいたためけがもなく有難いことでしたが、広島町の町から外へ外へと逃れて来る人たちは殆ど着ているものも焼け焦げて素っ裸、裸足のままフラフラとこの世の者とは思えぬ形相で郊外に帰ってきます。唇のたれ下がっている人、耳のなくなっている人、腕の皮膚が全面めくれて赤裸、被害の軽い人でも殆ど着るものなしの裸足で新じゃがの薄皮がよれよれにめくれるように皮膚があるやなし。全く地獄の有様で毎日のようにバタバタ犠牲者は死に、焼場など間に合わず、道路で焼いて始末するような有様でした。

私の母校、広島女学院では、それまで毎日のように先生と生徒たちが勤労奉仕に出ていて犠牲者は約三百五十名、将来ある十代の大切な生命を奪われたのです。今、広島女学院大学部に建立されている慰霊碑を前にする時、涙なしに見ることは出来ません。

毎年母校では8月6日、同じ頃、関東支部でも慰霊祭を催し、今年は五十周年を記念して関東では東京有楽町朝日ホールで新劇地人会の出演、母校の主催で「この子たちの夏」という朗読劇を上演しました。

地震は天災、原爆投下は人為的なもの、何の防備もない一般の市民を犠牲にすることは許しがたいことです。戦争を早く終わらせるために使ったと云いますが、一つには世界で初めてと云うことで、他国より先に使いたかった

と云われています。ロシアは先を超され憤まん耐えがたく、その後随分の実験をしたと云います。

この度はフランスの実験も各国の反対があっても中止には至らないらしく、また本日1995年8月17日のニュースでは今日中国で原爆の実験が行われ各国から烈しい非難の声が上がっています。

今までに原爆実験をアメリカは100回以上、ロシアは700回以上、中国は40回あまり行っています。この度の中国の実験に対して政府は中国に対しての無償資金協力78億円を大幅に減らすと云っています。

地球を汚し、大切な生命を犠牲にし、何のプラスがあるのでしょうか。

優しく人を思いやり、お互いの生命を大切に尊重し合う世の中であってほしいと思います。

毎年次々と広島慰霊碑に犠牲者の数が未だに増えてゆきます。原爆投下のあった後、医者であったすぐ下の妹の夫は被爆患者の治療にあたり、自分も二次感染で原爆患者となりました。私の身のまわりにはこのような話が次々とあります。当時広島近くに行っていた私は運が強いともいえますが今はただ亡き人たちの安らかな眠りを祈るばかりです。

私の戦争体験

石神 宮岡貞雄 80歳

私は昭和13年1月10日付で招集され兵役につき昭和17年1月9日付で招集解除を受けたのであり満四年間、当時満州国と呼ばれた地域で軍務につきました。従って太平洋戦争が昭和16年12月8日に起きましたがその時は外国に居たわけで、とに角激しい『ショック』を受け、それまでに大体申し渡されて予想していた帰国が実現するか、どうか気になったことは事実です。しかし前記の通り帰国招集解除となりました。当時の気持は今でも十分思い出しています。

冒頭に述べた四年間の軍隊生活は当時の『満州国』で過ごし、それを列記すれば陸軍二等兵（砲兵）、国境守備隊に配され、当時実施された幹部候補生（甲種幹部候補生）となり予備士官学校に入学しその卒業前早めに切り上げを命ぜられ後段で詳記しますが当時戦われていた『ノモンハン事変』に巡遣され参加した次第でありました。ノモンハン事変終了後も満州国にて部隊勤務、教導学校の教官等を務めました。階級は陸軍中尉になり、そして中隊長も命ぜられ在勤地は西北にあるハイラルがそうであります。

以上に在満時の概要を述べたが今回は直接参加し奇跡の生存を得た『ノモンハン事変』についてその体験を述べ多くの亡き戦友への弔辞にしたいと思います。

ノモンハン事変は昭和14年5月11日満蒙国境の或る箇所で小部隊が越境したから起こったと言われています。日満側は外蒙、ソ連側だと言っていたし、我々もそう信じていたが外蒙、ソ連は当然その反対を言っている。何れにしてもそれから約四ヶ月余りに亘り両者の間でこの国境を中心にそれは大小数十箇所に亘り全くやり切れない戦闘が続いたのであります。既知の通り戦場一帯は大草原地帯で樹木群は一、二箇所見られたが森林や耕地などもない有名な牧畜地帯であります。

戦場の環境に少し触れたが、それは『ノモンハン』の戦闘に大きな影響があるからで河は草原砂漠の特性上少ない『満蒙』国境と言われた『ハルハ河』そしてそれにそそぐ満州側のホルステン河が特に関係があるので述べておくことにします。

戦闘は戦線の拡大により複雑化し初期の日満軍の優勢、特に局地での有利な戦いもあったが6月、7月から反転、特に『ソ連軍』の戦車を中心にする機械化部隊の増加、総じての大攻勢、就中航空機の増加による膨大な爆弾投下は物凄い、従って空陸併せての日満軍の被害即ち軍事的に言って戦死者は多い、かかる状況下将校の補充として前述の通り『予備士官学校』がストップとなり特定の地区の部隊出身者、まず『ノモンハン』の戦場に向かうことになりました。私の身分は陸軍少尉になる前の『見習士官』であった、ハイラルに集まり砂漠の中を軍用トラックで5、6時間、否それ以上かかったと思う。前線に近付くにつれ砲声と砂漠特有の砂煙りが舞い上がっていて近づく程それが顕著となり、ついに基地点に着きトラックは止まった。大尉の人が二、三名の部下を引きつれ立っていた。こちらは敬礼して先方からの指示を受けた私は第一中隊に配属された。上司から指揮小隊長を命ぜられた。所属する砲兵（野砲兵）連隊中第一中隊はもっとも被害が少ないと聞かされた。多くは省略するがそれでも近くに砲声と落弾の砂煙りを認めてひしひしと戦争の真っ只中に居ることを痛感した。近くでの兵士の被弾戦死を見て顔には出せないが心で泣いたのは当然で戦死者は一般論は別として、その瞬間母親を呼ぶことが多かったことを思い出します。

8月末日本軍は完全に包囲され夜間に行動し突破をはかるのである。そして昼間は草原に穴を掘って夜を待つ次第であります但其の際に隣の兵の戦死を知り、最後の言葉を聞き重ねて泣いた。

我々の部隊（野砲兵）は大砲の移動は6頭の馬で牽引するもので従って砂漠では真っ先にねらわれ、当時はもう全部死亡し部隊全体で大砲は動かないのは勿論、次第に機能しない無用の大物となっていたことを付け加えて置かねばならない。反対にソ連側は全て機械化されていた。それは大砲の力のゼロに対し膨大な力であった。それはそれとして包囲網を突破してその圏外に出たのであったが、そして昭和14年9月になって両者間に停戦協定が成立したことで一応戦場は平穏になったのでした。

『ノモンハン事変』への私の参加は当時言われた功は無く、戦争の危機の中、友軍の上司、同僚兵士総ての間に及ぶ悲劇即ちその戦死を見、処置した地獄の経験であったと思います。その規模は大小比較にならないが『太平洋戦争』の初めから終わりまでに似ていると強く思います。

省みて一応戦時下の昭和17年1月に軍務を離れたのですがそれからの『太平洋戦争』と呼ばれた大戦争には当然関係がありますが次の機会を得ることにして之にて拙文を終わることにいたします。

私にとっての昭和二十年という年

野寺 菊地忠雄 70歳

私は昭和20年の正月は東京の蒲田に居った。前年の昭和19年6月、長岡工業専門学校二年生であった私にも学徒勤労動員令が下り、同級生十八人と大森の兵器工場、中央工業株式会社に赴任して居った。

正月と言えども、まとまった休日は無く、毎日、朝七時半から夜七時頃まで働いた。幸い私どもは中学生や女学生と区別され、機械を操作する現場でなく管理的業務が中心であったので重労働では無かった。併し自分の業務が終わってから、ヤスリやキサゲなどの仕上げ作業を現場で手伝い、深夜におよぶ事が多かった。

東京の空襲は昭和19年後半より再三始まって居ったが、本格的になったのは昭和20年2月頃からだったように思う。3月10日の江東区地区を中心とした所謂東京大空襲の印象は強烈であった。この空襲の酷さについては既にいろいろ報じられてきているが、目撃した私の記憶をたどってみる。

当日、私は夕刻より同僚数人と爆弾投下機製作の作業をしておった。空襲警報と同時に、上野、浅草方面に火の手が上がった。四階屋上に登って見る。

この日は強風で、寒さもきつい日であった。上野方面まではかなりの距離があったが、目の前が一面の炎に染まり、その中をB29が低空で次から次

へと飛来した。

二、三日後、友人と二人で上野駅に降り立った。見渡す限りの焼け野原で空襲の物凄さを現実のものとした。隅田川につきあたるまで歩いた。途中人影も無く、焼死体累々で放置されておった。また隅田川には熱さで川に逃れた人が数多く浮かんでおった。全く無残としか言いようが無かった。死者十万人という。

4月13日夜、空襲警報、寮に居ったが今夜は大森地区らしいとの事で、防空頭巾をかぶり工場に向かって走る。工場にも焼夷弾が落下し、火災が発生した。危険状態になったので、同級生の伊藤君と二人で池上本門寺の丘を目指して避難する。焼夷弾は雨霰のごとくザーと言う音と共に落下、始めのうちは道路に伏せたりしておったが、間に合わなくなる。近くに落下する時はピュンと言う音に変わる。約二十分程走って本門寺の石段を登りきった時、本堂に焼夷弾が直撃し、目の前で伽藍が焼失していく。

此处も駄目と馬込方面に向かって走る。避難の人たちが続々と集まる。子の名を狂気のようになって呼ぶ母、母の名を呼ぶ幼児、正に阿鼻叫喚の巷である。夜が明け、工場への帰途につく。見渡す限りの焦土、鉄筋コンクリートの建物以外何も残っていない。途中の道には焼夷弾の弾筒が雨後の筍のように無数に突き刺さっていた。よく体に当たらなかったものと改めて寒気がした。工場は全焼、寮も全焼、各自一旦家に帰ることとする。上野駅から長岡まで貨車に乗車、此の頃は切符も自由には買えなく、会社などの証明が必要であった。数日後、上京し工場の焼け跡整理などをして居ったが、新しい寮も再三焼夷弾に見舞われるなど東京に居ることが無意味になったので6月中旬、同級生18人で長岡に戻り、学校の機械設備を使用しての生産が始まる。

長岡は当時7万5千人程の地方都市であったが、新潟県の中心部に位置し軍需工場が多く、また山本元帥の故郷であった。7月に入ると米軍の偵察機が長岡空襲の予告のビラを散布するようになる。

8月1日午後十時過ぎ空襲警報、私の家は郊外の宮内の鉄道宿舎であったが、近くに焼夷弾落下、私を除いては近隣の人々は、初めての空襲なので、我先にと越後山脈の方面に向かって避難する。私の家は当時、父母と軽い脳梗塞で床について居った祖母と妹五人、弟一人であった。私のすぐ下の弟は海軍航空隊予科練習生を志願し兵役中であった。母や妹たちを避難させ、父と、祖母の箆笥を近くの田に持出し、その上に祖母を担ぎ出して寝かせる。眼前で我が家の焼失していくのを父と二人で呆然と眺める。

焼け跡に二日程野宿したが、戦争は何時終わるかも分からない時であり、母の兄が持っておった信越線北条の駅から三十分程入った山小屋に引っ越す。どうやって引っ越したのか記憶が薄れてしまっていて居る。八畳と三畳程の板の間であった。長岡での戦災での焼死者は千五百人、市内の住宅地は全滅、学生の下宿先も、ほとんど焼失した。学校は焼けなかったが、登校は無意味になって居った。

8月15日正午の終戦の玉音放送は、小屋から北条の駅に行く途中で聞いた。何のことかよく聞きとれなかったが、戦争が終わったらしいと言う事は感じた。途中の樹木の上では油蟬がジー、ジー、と激しく鳴いて居った。

8月21日、祖母が誰も気がつかぬ中で息を引き取った。八十歳であった。戦災で焼き殺されなかっただけが気休めとなった。村では私たちは他所者であり、村で火葬にするには沢山の薪が必要とのことで断られ、母の実家のある柏崎で火葬の手続きをし、荷車に棺桶を積んで四里程の砂利道を伯父、父、私と妹二人で火葬場まで運んだ。暑い日であった。

8月末、弟が無事復員し、一家10人で柏崎の母の実家に引っ越す。9月に入ると柏崎に沖縄よりの米軍が進駐して来て、理研工場（株）の寮に入る。家が比較的近くでもあったし、学校での用も無かったので、今でいうアルバイトのつもりで雑役に従事する。無一文の我が家であったので、進駐軍から貰う毛布やチョコレート、ガム、タバコ、缶詰など生活を潤した。併し進駐軍は約一か月ほどで引き上げた。

9月20日は卒業式であった。当時三年制であった学業は二年前から半年短縮されておった。校長は機械設計の権威であった坪井道三先生、卒業生三百人余り全員が一人の職もなく世に送り出されること、感無量であった。

さて学校は卒業したものの職も無く、大家族で叔父の家の居候、遊んで居るわけにはいかず身の置き処に苦しむ。

秋でもあり、近くの山は茸の宝庫、弟と二人で天気の良い日は毎日茸取りに出かけた。その日の食卓にのせるのは勿論、冬の食料としての保存食用に塩漬けにする。併しこれも11月を過ぎれば終わりである。

此の頃より知人の方から私の職の話がまとまりつつあった。一つは仙台鉄道局の機関庫、もう一つは仙台発動機という六十人程の鉄工所であった。私は鉄工所の方を選び、昭和21年1月4日故郷新潟を離れる。

昭和20年は勿論、日本にとって初めての試練の年であったが私にとっても生涯忘れることのできない多難な年であった。

戦争体験からの戒め

野寺 永松清英 69歳

私は大正の末期に生まれたので、昭和の年数が年齢と同じ歩みで、興亡と激動を極めた昭和そのものが私自身でもある。

日中戦争が始まった時、私は小学五年生であったが、戦争そのものの実感はまだなかった。然し「わが大君に召されたる命栄えある朝ぼらけ…」の出生兵士を送る歓呼の声が駅頭にこだまし、千人針を縫う光景が見られるようになり戦雲は慌ただしくなって来た。

昭和16年12月8日、私は旧制の中学三年生で、満十六才になっていた。この日ラジオで米英両国と戦争状態に入ったのを聞き、興奮と緊張のうちに登校した。

日中戦争が未だ片付かない内に、今度は米英の二大国を相手に戦うことになりこれは大変だぞと思ったが、開戦早々の連戦連勝に、すっかり酔ってしまい、学校でもひとしきり戦果の話で持ちつきりであったが、昭和17年6月のミッドウェー海戦に敗れてから翳りを見せ、8月から愈々アメリカの反撃が始まった。級友も三人、四人と甲種予科飛行練習生に応募して行った。

「若き血潮の予科練の……」の歌が流れる中で友人を見送った。

農家の稼ぎ手もどんどん徴兵され、手不足となり、この手伝いに私達も学業そこそこに田植え、稲刈りにと動員に駆り出された。昭和19年に旧工専に進学したが、間もなく学徒動員令に基づき、熊本の三菱飛行機製作所に動員され、飛行機の胴体、翼になるジュラルミン板の板金作業についた。理工科系の学生は徴兵を免れたが、文科系の学生はどんどん徴兵されて行った。次に動員させられた所は門司の神戸製鋼所で、ここでは砲弾の薬莖の材料になる真鍮板の製造であり、電気炉で溶解、鑄造の熱作業で昼、夜の別なく働いた。高粱米か、芋、すいとんばかりで高熱作業は辛かった。時たま親元から送られてきた大豆を煎って皆で仲良く分かち合い、水を飲んで腹を膨らませていた。北九州は当時日本一の工業地帯であったが、空襲による特別大きな被害は無かったが、それでも毎日空襲警報が鳴り、B29が来襲し高射砲が盛んに迎え撃つが全然当たらず、B29は小馬鹿にしたように悠々と飛び去って行った。

戦況はラジオ、新聞でしか分からず、南方方面から日本軍が遂に撤退し始めたが、それでも皇軍が挽回するに違いないと信じていた。

サイパンが攻略され、沖縄上陸作戦、そして一億総玉砕が叫ばれ出した。広島、長崎に新型の特殊爆弾が投下され、その凄さに驚き「ピカドン」と、

相当の被害が出たらしいとの話が広まったが未だ実感が無く、尚神州不滅を信じ動員作業に精を出していた。

8月15日昼、全員ラジオで玉音放送を聞いた。ガーガー雑音が入って聞き取り難かったが、日本は無条件で降伏したらしいとのこと、なんだか虚脱感と拍子抜けがして帰郷した。暫くして学業が再開された。

私は戦争にも行かず、又悲惨な空襲の体験もしていないが、学徒勤労動員と云う形で国に奉仕した。当時は何の不满も不平も云わず、殆どの人は何らかの形で奉仕したが、それが当たり前の事であり、寧ろ批判したり、非協力的な者は非国民として軽蔑していた。

最近の映画で「聞けわだつみの声」、「ひめゆりの塔」等が戦後五十年の記念企画として上映されているが、この映画を見た若い人へのインタビューの答えが「特攻隊に行くのが否なら断ればよかったのに」とか「どうして戦争反対の運動をしなかったのか」等の質問があったようだが、今の人から見れば当然の疑問と云える。当時は当時として、ノーと云える時代ではなかった。反戦を叫び、徴兵を拒否しても牢獄に繋がれるべきであったか、今の時代、人の価値観で判断することは難しいのではないか。

私達の戦前、戦中の教育は何でも丸暗記の時代であった。小学五年の時には国史で歴代の天皇名「神武、綏靖、安寧～～明治、大正、今上」百二十四代の天皇名を丸暗記させられ、教育勅語、軍人勅諭も丸暗記させられて来た。小学校入学時から朝は校門で奉安殿に向かって最敬礼する。この様な教育と育ち方をして来た私達は専制を極めた軍部の独裁者が云うが儘に操られてきた。

最近或る宗教団体の事件が大きく報道され、社会問題になっているが、これも教祖のマインド・コントロールで信者は善悪の判断がつかない儘行動して来たようであるが、私達の幼い頃からの丸暗記教育と、一脈相通ずるところがある。

言論の自由を奪い、丸暗記教育を受けてきた私達を、聖戦と云う名の元に人間心理の集団性を見越し、マインド・コントロール、三百万人余の人命を奪った戦争を我々は体験して来たが、後世私達の時代の様な丸暗記教育が再来しないことをひたすら願う次第である。

戦後五十年

野火止 福島震太 71歳

一、米軍機

私が米軍機を始めて見たのは、昭和18年4月だったと思う。場所は池袋の上空であった。まだ在学中で、昼休み、鈴懸けの径を歩いていたら腹に響く爆音と共に、真っ黒な胴体の太い飛行機が東から西方に向けて、校舎の真上を飛んでいった。かなり大きく見えたので高度は三百から五百メートル程ではなかったかと思う。その機体の後ろから追いかけるように高射砲の弾煙のかたまりが次々と上がっていった。これが帝都最初の空襲の米軍機で、ドーリットルの率いる艦載機の内の一機であることをあとで知った。

マッカーサーの占領直後、日比谷公園が、ドーリットル広場と改名されたが、そのドーリットルの飛行機であった。飛来したのは一瞬の出来事であったが、今だに印象に強く残っている。

二、学徒兵として

明治神宮外苑競技場での雨中の学徒兵壮行会の行進後、12月1日、出征することになった。

当時、豊島区椎名町駅近く長崎というところに住んでいた。氏神様は駅前の長崎神社であった。私は長崎神社の社殿に額づき、社前で送ってくれた人達に、帝国軍人として出征する決意を披瀝した。

「この長崎の土地に生まれ育った多くの人達、私達の先輩が、日清・日露の戦争に出ていく時、この社に額づき、武運の長久を祈り、お国のため、郷土のために戦場に参りますと固い決意をもって、今、私がここに立っている様に、人々に前に立ったことでありましょう。私もそれらの諸先輩の名誉と誇りを汚さぬよう、立派に奉公して参ります。」

日本中の青年男子は、それぞれの産土（ウブスナ）神や、自分を守り育ててくれた郷土の氏神様に拝礼し、千人針を腹に巻き、日の丸の小旗に送られて出征していったのです。

三、通信兵として

昭和18年12月1日、小田急線、小田急相模原駅の近くにあった東部八十八部隊に入隊した。ここは東京中野にあった電信第一連隊が移転した所で、有線と無線の中隊に分かれており、私の中隊はマ隊という無線中隊で正門から一番近い所にあった。正門の右脇に守衛所があり、その建物の裏側には営倉があって、罪を犯したものが紐類をはずされて入れられ、食事は鉄格子の小さな下窓から入れるという獄倉であった。他人の物を盗んだら重営倉とな

って入獄する所だと、入隊した初日に脅かされていた。

軍隊という所は員数を合わせるという事が必要且つ、大事な事で自分の持ち物がなくなった場合、どこかでその埋め合わせをしなければならないのである。入浴場に行く時は、営内靴という靴を履き、兵舎内で履くスリッパである上履きを持って行く、よく注意していないと風呂上がりの気のゆるみで、これらの履物がなくなってしまうのである。

ある時、入浴後、靴箱の所に行くと私の上履きが見当らない。一瞬、目の前が真っ暗になった。とにかく、中隊に戻って班長殿に相談する。すると、「何処かへ行って持って来い」と言う。つまり員数合わせのため盗んで来いという事である。もし盗んでいる現場を発見されたら、私は守衛所の裏の営倉に入らなければならない。営倉に入った自分の惨めな姿を想像し、両親の顔、兄弟の顔、長崎神社の社殿等が次々と浮かんできた。

私は意を決して隣の中隊の入口にそっと近づいていった。あたりを見廻した。運よく、夕食時間だったためか誰れも居ない。うまい具合に一足、上履きが無造作に脱ぎ棄ててあった。私は急いでそれを取り上げ、小脇にかくして、自分の中隊に飛び込んだ。とにかく成功である。ほっとして、持ってきた上履きをよく見ると、内側には真っ白な兎の毛らしく毛皮敷きで、軍隊の最高級品と思われる。とても二等兵如きが使用できるようなものではない。早速、班長殿の所へ行き、自分の持参した品物を差し出した。すると、班長殿は「これはすごい。きっと、中隊長の使っているものに違いない。」と目を見張って受け取ってくれ、別の二等兵相応の品を出してくれた。

他人の物を盗むという犯罪は、深く心の底に残るものである。重営倉の獄舎が目につく、その後、正門を通る度にあそこに入らなくてよかった。親、兄弟、郷土の人々に恥を漂さなくてよかったとつくづく思っている。運が悪ければ重営倉を体験していたかもしれないのである。

戦争体験

大和田 井原ふみ江

昭和16年12月8日、大東亜戦争が始まりました。まだ小学三年生だった私は、戦争がどんな事かもよく知りませんでした。若い男の人達は、皆戦場に出征して行きました。私達子供も、学校から出征兵士の家に畑の草むしりなど、手伝いに行くようになりました。

だんだん戦争も激しくなり、工場という工場は、皆軍事工場になり、私達

も野火止の中外加工に学徒動員で、鉄砲の弾作りに行かなければならなくなりました。朝、学校に行くと白いハチマキをして、若い血潮の予科練のと、皆二列に並んで、若鷺の唄を大きな声で歌いながら工場に行き、工員さん達に混じってできないながらも皆、お国の為と一生懸命働きました。私達の町にも警戒警報、空襲警報が毎日のように続き、B29が、青い空高く飛行機雲を引いて、悠々と飛ぶようになりました。

夜、寝る時は、枕元に防空頭巾や、身の回り品を置いて休みました。空襲になると、私は三才になる弟を、「空襲だよ。」と抱き起こし、防空頭巾をかぶせ、帯で背負い、母は、妹を背負う、祖父は、弟の手を引いて、裏の竹やぶに掘ってある防空ごうに入りました。中は、三畳ぐらいあり、下にわら布団を敷き、夏は、カヤをつって入りました。

ある晩、ものすごい地ひびきがして、柳瀬川にそって、爆弾が何十発と落され、たんぼに大きな穴がいくつもあきました。電線には電波妨害のテープがたくさんひっかかっていた。空襲になると、東京方面に焼夷弾や爆弾が落ち、空まで真っ赤に燃えているのがよく見えました。祖父が、「東京が又、燃えている。気の毒だなあ。」と、つぶやいていました。私は、皆元気で家も焼かれず幸せだと思いました。

東京の谷中におばあさんが疎開して来ました。家の中にもぎやかになり、空襲のない時は、おばあさんと、お手玉やおはじきをして遊びました。やがて、艦載機が家の方にも飛んで来るようになりました。友達と庭で遊んでいると、空襲のサイレンも鳴らないのに、艦載機は何十機と飛んで来ました。私達は急いで防空ごうに駆けこみました。一人の友達は、飛行機を見ていました。そのとたん、一機が音もなく急降下して来て友達めがけて、「ダダダダー」と撃って来ました。友達は、あわてて防空ごうに駆けこみました。真っ青な顔をしてガタガタ震えていました。生きた心地がしないとはこの事だなあと思いました。

8月に入ると広島や長崎に原子爆弾が落とされました。一面、焼け野原になったそうです。8月15日天皇陛下の重大放送があり、戦争が終わったことが伝えられました。真夏の太陽が朝からギラギラ照りつける日でした。

慟哭の譜―海行かば水漬く屍―

新堀 森田勝郎 78歳

私は昭和19年7月1日、召集を受けて、横須賀の地を踏んだ。空一碧の

夏の暑い日であった。横須賀駅には、海兵団から派遣された多くの人々が集合していて、私達を引率してくれた。

大きな門柱の右に、横須賀海軍警備隊、左に、横須賀海兵団と、筆太に書かれた文字の傍に、着剣した歩哨が屹立していた。

私達多くの應召兵は、引率者によって、隊伍を整え、歩調をとって、営内に入った。すぐ前に、横須賀の海が広々と見えた。

思えば、遠き50年前のこの日、私は若く、27才の青春の日であった。この日に至る迄の、当時の私の周辺について、少々のことを述べたいと思う。

昭和17年10月、私は旧四大財閥の一つの直系企業に入社した。その翌年の冬、12月。当時の戦時徴用令によって、東京都下立川に在る、陸軍航空工廠（昭和5年、勅令によって、設立された、陸軍唯一の工廠といわれる）に入所した。第一発動機製造所に配属された。発動機の細かい部品を検査する所謂、検査工であった。自宅からの通勤ではなく、工員宿舎に收容されて、6ヶ月余。ようやく、仕事に馴れた、6月半ばであった。母から「召集令状来たる、直ぐ帰れ」という、電報が届いた。所長（陸軍大尉）、班長（下士官級）の許可を得て、私は家に帰った。

召集令状には「昭和19年7月1日、横須賀海兵団に入団すべし」。東京聯隊区司令部とあった。

当時の我が家は、母と妹と私の3人であった。大正10年生まれの弟は支那派遣軍に属して、南京に在った。その下の、大正13年生まれの弟は他家に居て、これは、現役兵として、入営直前であった。父は昭和13年、死去している。母と妹の生活は、会社より支給される俸給により、心配はない。併し、私の召集によって、これから、どうなるのか。軍隊に入れば勿論、戦争中だから、生命の安否は保障の限りではない。弟達とて同様であろう。戦争は激烈を極めて、わが国に益々、不利に傾きつつある。

私は麹町区（現在の千代田区）大手町に在る会社へ寄って、召集の旨を告げた。

日の丸の国旗に、社長初め、多くの方々から、寄せ書きを頂いた。多分の餞別も戴いた。

自宅の町内会からも、送別会を初め、激励の言葉を受けた。ほんとうに有りがたかった。

7月1日の早朝、玄関の前で、母と妹と3人で記念写真。そして、私は横須賀へ向かった。

こう書けば、いとも簡単だが、当時の私の心境は、名状し難い、何かが有

った。

厳肅な入団式に於いて、海兵団団長（海軍少将）の訓示あり、「諸子、今こそ、水漬く屍となって、聖旨に添い奉るべきである。」との、激烈なる言葉に、私は胸底に、運命を覚悟した。

第11教班というのに配属された。先ず、総員起こし、五分前に初まって営内行動から、訓練は厳しかった。これは戦後になって、判明したのだが当時、サイパン島に於ける戦闘は、苛烈を極めていた。大本営は、この戦闘に救援を行わずとの方針で定まり、陸海軍守備隊は、玉砕寸前にあったというそれで、海兵団全体が、殺気立っていたとの事であった。其処へ入団したのだから、あらゆる面での猛烈は、けだし、当然だったろうと思う。その為か半ヶ月余で、左膝の関節の間に、小指大の骨が突き出て、折りまげが出来なくなった。当時、その症状があった所へ、訓練が激しく異常発達したのであろう。

これじゃ、仕様がないうので、教班長（海軍一等兵曹）が、海軍病院へ同行してくれて、軍医長（海軍軍医中佐）の、診察を受けた。その結果、召集解除。

軍医長は「東京帝大病院の塩田外科へ入院せよ。」と指示してくれた。

私は死を覚悟していたのに、急転して、召集解除と聞いて、しばし、呆然とした。私は、海兵団を去った。

そして、東京帝大病院の塩田外科へ入院、塩田博士の診察を受けた。病名は、左膝半月損傷とあった。手術後、1ヶ月余で退院した。

そして、翌年1月、会社へ復社した。3月には、B29の大空襲により、当時、本所区（現在の墨田区）にあった家は焼けた。本所、深川の、下町一帯は壊滅、焦土となった。その悲惨さは、あまねく、人々の知る通りである

昭和20年8月15日、「五内爲に裂く。」との、初めての、天皇陛下のご放送によって、慟哭の終戦となった。

支那から復員した弟も肝臓で死去。その下の弟も、内地復員後、栄養失調で死去。私は晩歳、78才の老骨となった。

終戦から、星霜此処に50年。大日本帝国から、日本国へと推移した。

その当時、関東軍参謀として、維幕に参画。ソ連軍によって、シベリヤに抑留された、瀬島龍三さんの句がある。

国破る大満州の夕日かな

正に慟哭の譜というべきであろう。瞑目、合掌して、稚拙の一文を結びたい。

再会—私たちの学童疎開

新堀 竹森絹子 58歳

「先生、常鑑寺（じょうかんじ）よ！」

渡良瀬（わたらせ）溪谷の山あいを縫うようにして走る観光バスの車窓から、突然、視界に見え隠れする、山腹の深い緑に包まれた、赤いお寺の屋根を指差して、私は隣の席の荒木かな先生の肩を押した。

わたらせ溪谷鉄道（旧足尾線）に沿って続く、国道を走るバスが水沼駅を過ぎたところから、私は急に落ち着かなくなり、腰を浮かして左側の窓の風景を注視していたのである。私の幼い記憶に間違いはなかった。

常鑑寺との再開は、学童疎開から帰った終戦の年から、実に四十七年ぶりであった。それも当時の荒木先生と一緒にである。私と先生の興奮ぶりに、車中の仲間たちもいっせいに視線を向け、一瞬のうちに通り過ぎる常鑑寺を見送った。当時の鄙びた山寺と代わって、鮮やかな赤い瓦屋根の色が印象的であった。

1994年6月、新座市の公民館講座の館外授業のバス旅行の一コマである。

人生の中で、「劇的な再会」が小説上の出来事ではなく、実際に自分にも起こりうることなのだというのを体験したのが、荒木かな先生との再会である。今でもあの場面を回想すると、名状しがたい思いにとらわれる。

それは十年前のことである。新座で「戦争と平和」をテーマにした集会に参加したとき、講師の一人が赤羽で敗戦を迎えたことを知り、私は終了後講師に話かけた。私は赤羽で生まれ、終戦の翌年まで十年間住んでいたのである。そこへ個々一、二年来、市内の公民館で顔見知りになっていた「荒木さん」が近づいてきて、私に声をかけた。

「竹森さん、赤羽に住んでいたの？」「赤羽から学童疎開に行ったんですよ」「私も赤羽小から行きましたけど？」「群馬県の水沼ですが、常鑑寺というお寺……」「私もそうよ」「えっ？……荒木……先生ですか！」

一瞬、何が起こったのか私の頭の中は真っ白になった。こんなことってあるだろうか。信じられないまま、二人は手を取り合って見つめ、お互いを確かめ合っていた。終戦の年に別れたまま、42年も経って、突然、荒木先生にめぐり会うなんて、私にとってはすでに神話か伝説の人のように思っていた先生である。二人のあまりの驚きぶりに、気がついたら回りに人垣が出来ていた。

＊

昭和20年3月、赤羽駅から父母や先生たちに見送られ学童疎開へと出発した。私は小学三年生、五年生までの三十数人の子どもたちのうち最年少であった。母はその日のために子ども用の夜具を一式、お揃いの花柄で作ってくれた。私はうれしくて、荷造り前の布団に何度ももぐり込んではいしゃいでいた。一人っ子の私は親から離れてくらす不安よりも、仲間たちとの初めての共同生活に胸をときめかしていた。同行する先生が二人、寮母さんが二人で、その中に荒木先生がいらした。

疎開先の常鑑寺は、渡良瀬川の上流の幾重にも重なり合う山あいであり、下の道から百段あまりもある急な石段を登った山腹にあった。お寺の本堂からは眼下が一望でき、私たちを乗せてきた汽車が白い煙を吐きながら、水沼駅を通過していくのがよく見えた。

私たちの寝起きするところはお寺の本堂で、朝六時になると住職の勤行が始まった。最初は仲間たちとの生活を旅行気分で過ごしたが、何日か経つと山寺の単調な自然や生活に、母恋しさも手伝ってホームシックにかかっていた。それに拍車をかけるように、食料や生活物資の不足が始まり、空腹とノミ・シラミの大量発生に悩まされ、着物や母の手作りの布団にもびっしりとシラミが住みついて、夜もオチオチ安眠できず、私たちは次第に元気を失っていった。ヒマがあると本堂の回廊に佇み、眼下の水沼駅を見下ろしながら、ぼんやり、通り過ぎていく汽車を眺めていた。

疎開先の生活は、時々地元の学校に行き、村の生徒と一緒に朝礼を受け、校庭を行進した後、私たちの教室になっていた和室の裁縫室で学習をした。一方、地元の農家に手伝いに出掛け、麦や野菜・桑畑などの草取りやいも掘り、また山から薪運びもした。都会育ちの子どもたちにとってはかなりの重労働だったが、作業の後で農家が用意してくれる、いもやかぼちゃなどのおやつに引かれて、夏の暑さにも耐えたというのが本音であった。甘いお菓子などもちろん無かったから、子どもたちは桑の実を見つけると、口のまわりが真っ赤に染まるほど食べた。いまでも桑の実を見つけると、その時の感慨におそわれる。

先生たちにしてみれば、子どもたちの空腹を満たす苦肉の策だったに違いない。B29の来襲も無く村は平穏で、土の温もりや草いきれ、渡良瀬河原の川音など、自然とともに生活した体験は、私と自然のふれあいの原点になっている。昭和二十年十月、帰って来た東京は赤羽まで一面の焼け野原であった。

＊

戦後四十年、私はなぜか学童疎開のことを記憶から閉ざしてきた。それほど幼い子どもにとって、異常な戦争体験だったのである。戦後の激動期を、親たちと一緒に生きるのが精一杯だったということもある。四十歳の半ばを過ぎて、やっと子育てに一段落した頃から、急に学童疎開の記憶がよみがえった。仲間たちはどう生きてきたのだろうか。自分の戦争体験を検証する気持ちが高まってきたところに、荒木先生との再会があったのである。先生との戦後五十年の軌跡をそれぞれたどってみれば、お互いに戦争体験が原点にあり、平和と民主主義をテーマに生きてきたことになる。見えない糸でたぐり寄せられるように、私たちは再会したように思えてならない。

常鑑寺の前で先生と一緒に写っている、セピア色の写真の中の母はすでに亡く、いま私は先生と共通の問題意識を持ち、地域で一緒に活動をしている。

あしあと

大和田 高橋庄吉 76歳

忠君愛国大和魂、生れ乍らにして道德教育をたたきこまれた大正生まれの小生は、昭和14年11月31日早朝我が家を後に氷川神社前にて、長谷部万五郎町長さん始め、兵事係り各種団体、小學校生徒等多数の方々の祈願祭に参列必勝激励の挨拶を戴き、一路志木駅に向かった。歓呼の声や旗の波長蛇のごとく列ができ、志木駅到着万歳万歳歓呼の声に送られ志木駅を後にした。一夜東京の親戚に泊まり翌12月1日、赤羽工兵第三十二連隊要員として、入隊した。食料不足の十日間代用食芋飯などで過ごした此の間営庭や都内を流れる荒川の河川で猛訓練を受けた。そして、多くの人の歓呼の声や旗の波に送られて、東京駅より品川を経て東海道線を一路征途に向かった。

途中駅で国防婦人会の旗の見送りや湯茶の接待等を受けながら、輸送船の待つ神戸港に向かったが、その輸送船の出発が遅れるというので神戸市内の民家に分散宿泊約一週間程過ごす間、六甲山や湊川神社等へと行軍の毎日が続き、夜は夜で町内で催す歓送会に招かれ大勢のホステスさんの接待を受けたりした。やがて輸送船も入って他の部隊と共に乗船し12月15日玄界灘を波にもまれながら一路支那大陸へと出航した。船中では演芸大会等が催され船酔いする人も少なく、一週間の船旅を終え、21日無事塘沽へ上陸翌22日夜汽車にてそれから軍用車に乗るまで二、三時間あったが、寒かったというよりも、行き交う駅員の殆どが支那人だけに何んとも慣れないせいも

あつて恐ろしく感じた。途中、天津、済南、兗州を通つて、三日ばかりたった夕方目的の済寧城内の駐屯地へと行軍し、やっとそこに落ち着いた。

初年兵教育隊

それからという日々は、雨が降っても雪が降っても木枯らしの吹く中で厳しい訓練が続いた。

連結、土工、漕舟、演習演習、休憩時にふと大空を見ると凍るような星が故郷を思わせた。日祭日の外出の楽しかった思い出も多々あつたが、何よりも毎夜のビンタがいかに恐ろしかったか印象に、一期、二期の検閲も終わり一人前の兵と成つた。早速出陣の日が来た。

中原会戦 「概要」

北支方面群は、かねてから計画準備したところにより、南部、太行、中條両山脈の峻険山岳地帯に堅固な根拠地として北支の治安を攪乱していた。衛立煌麾下の中央軍二六個師団約18万に対し、方面軍の主戦力「六個師団」、二個混成旅団、一個騎兵旅団各主力をもって、包囲作戦を実施し、敵軍に与えた損害は、捕虜約三万五千、遺棄死体四万二千を数え、我軍の損害戦死673負傷2292であり、その戦果は支那事変を通じても稀に見るもの。昭和16年4月11日、工兵三十二連隊が編成され済寧駅出発一路大原に向かい、いよいよ作戦行動に移り、昼夜連続、山中の道なき道の行軍、山を越え翌朝の歩兵や砲兵の追撃戦それは実にすさまじく、細い山道には多くの生々しい敵の死体のごろごろしている。薬莢の臭いが鼻をつき銃機関銃らしい薬莢がたくさん散乱していた。幾日か経た後、途中敵のトーチカが幾つかあり、どうしても歩兵の進軍ができない、そこで工兵一個小隊の決死隊が編成され勇敢に攻撃を開始、たちまち敵のトーチカを粉碎した。我方の戦死者一名で、他は無事に帰る。そして又山中の行軍がはじまり、皆汗だくだく、途中山の中腹に清く細く流れる小川に辿り着くと、我先にと一斉に顔や頭を洗い一息ついた。するとその川の周辺の上にも下に既に四、五日たったかと思われる死体があるのに気づき驚いた。周囲の水も血に染まっていた。又死体をまたいで通らなければならない時もしばしばあつた。日本馬が足をやられて川辺に置き捨てられた哀れな姿も見受けられた。十日ばかりたつて再びそこを通つて見ると馬が野犬に喰われて骨と皮だけになっていた。

敵の死体も所々にやはり野犬に喰われ白骨だけが残っていた。山を下りてその部落に幾日か露営する事となり、道路や架橋を構築し、中でも自動車道の構築は爆破作業が毎日続いた約一か月で輸送路完成し、駐屯地に帰る。

魯中魯東作戦

昭和17年2月1日より

此の作戦は野火止出身の故三角中尉が作戦参謀長を務めた。北支方面軍の作戦で我々工兵隊の目的は途中の道路の構築や野砲の進入路の構築であった。その野砲を丘の中途へ上げる進入路構築直後敵の猛銃撃の中で進入に成功。それに続いての砲撃開始は実に勇ましく今でもその光景が目に浮かぶ、たちまち敵軍を撃滅に成功。続いて魯東作戦の為青島の兵站基地に三角中尉隊長指揮する歩兵部隊、野砲、戦車隊等各部隊続々と集結した。作戦行動に移るまで、四日間程兵站に待機した。このときの思い出、三角中尉さんの案内で八名ほどの幹部と共に二里ほど離れた青島の町に日本人の経営する寿司店で三年振りに飲みあかした。そして翌日突然出動命令がでた。工兵隊の出番である。何処、何処の地点まで自動車道の構築しつつ前進、兵站に待機中の各部隊がいよいよ出動しはじめた。戦車隊は半島の海岸辺を包囲し野砲隊の砲撃に続き歩兵部隊の進撃戦が夜まで続いた。

昭和18年戦争は次第に拡大し大東亜戦争にそなえ、支那大陸軍隊は南方転出準備が始まり私達は就任四ヶ年の歳月の為本国に帰還命令がでた。

昭和18年10月30日千葉県佐倉にて除隊する。多くの出迎えの方々の歓迎を受けながら我が家についた。

その後の情報によれば昭和19年4月南方に向かう船団は上海を出港したがルソン島近海にて敵潜水艦の魚雷によりすべて海没した連絡あり。昭和19年11月10日B二九本土上陸に飛来偵察。その後本土爆弾投下も日増しに厳しくなり。

昭和20年4月5日召集令状により千葉県東部八三部隊に入隊埼玉県指扇町立小学校に駐屯終戦を向えた。

私の戦争体験記

野寺 藤森都

野寺に移住して二十余年ついで最近に至って私は身近なところに痛ましい戦争犠牲者のいた事を知りました

婦人会、その他の会で、お仲間のEさんのお話から、五十年前の空襲下で近くに住んでいた叔父さん一家を防空壕爆弾直撃で亡くされ更に離れに住んでおられた叔父さんのご両親も、爆撃の火災で焼死されたとのことでした。

野寺は今までも何回となく不発弾の掘り出しなどありましたが、近くに亡くなった人の縁者にEさんがおられたことは知りませんでした。一見のど

かに見える地域でも戦争の傷跡は至るところに残っていることを思う時、私は自分の生まれ故郷でもある大田区。かの京浜地区大空襲を思い出します。全くこの世のものとは思えない地獄其のものの焼け野原が五十年を経ても、鮮明に思い起こされます。其の頃、私の家は間引き疎開で倒され、近くの知人の家を間借りしていました。

母と嫂と四才と二才の姪と合わせて五人の女ばかりの暮らしでした。昭和20年3月の深川江東地区の空襲大火災により、銀座、新宿その他東京も被害が増大していました。更に広島長崎と原爆が落され皆不安で一杯の日々でした。一機でも防空壕に入るようにとの指令も出ていました。いずれは自分たちの方にもと思っては、いましたが、ついにきた其の夜京浜地区の大空襲です。真夜中何時ものように空襲警報のサイレンが鳴り響き、警防団の今夜はこっちだ早く逃げろの声が聞こえました。

防空壕に入るのではなく早く逃げろには私達はすっかりうろたえてしまいました。何か持っていかなければと思いつながらうろうろするばかりでした。とにかく母と嫂で姪達を背負い外へ飛び出しました。其の時表の道は足早に逃げる人達の姿が一杯になっていました。やがて逃げる道の先々で焼夷弾が落ち驚いては引退し又別の道をただ夢中で歩いていました。川沿いの道を歩きながら嫂が呟くように言いました。どうせ焼夷弾で焼死ぬならこの川に飛び込んで死んだ方がましと、母と私は馬鹿なこといわないで逃げられるだけ逃げよう海の方へ行こうと嫂を励ましながら海へつづく道を歩きました。間もなく海の手前の堤防が見えてきました。其の処は水産試験場なる建物の庭につづいていました。ほっとして皆へたへたと座ってしまいました。身を寄せる堤防の石垣の先は海、東京湾です。羽田飛行場が目の前に見えます。敵機の落す照明弾によって、昼間のように明るく待機している飛行機も何十機かみえました。敵機はものすごく音を立てながら急降下して爆弾を落とすようでしたがほとんどが海へ落ちました。まるで映画の一コマを見るような空中戦もありました。黒煙をはいて落ちてゆく飛行機は敵か味方かはわかりません。それでも大声で声援をおくっていました。ふと気付くと私が手に持っていたものは右手にバケツ、左手に子供の昼寝布団という慌てようでした。少し落着いて辺りを眺めると堤防の石垣に避難している人達は何百人も、いるようでした。やや落着くと家の方が気になり西の方を眺めると空まで真っ赤に染まっているようでした。その内何処からか川崎や蒲田は全滅だと云う声が聞こえてきました。空中戦を見ながらも何時自分達の方に爆弾が落ちてきはしないかと不安もあり長い夜を感じました。

何時の間にか夜が少しづつ明けてきたようで東の空が白みはじめました。敏機も去り、辺りは静かになりました。其の頃、焼跡の様子が少しづつわかるような情報が流れてきました。私達も家の事が心配になり母と姪達を残し嫂と二人で焼跡へ戻りました。幸い私達の間借りの家は残っていましたが辺りは一面の焼野原で灰色の空、くすぶる煙の中より焼け残りの電柱がメラメラと赤い炎をはき、まるで蛇が舌を出しているような光景でした。やがて激しい驟雨があり、すべてを消したかの様に思えましたがくすぶりは何時までもつづいていたようです。

その後間もなく玉音放送を聞き、終戦となりましたが空の青さを見られなかったあの日の灰色の空と燃え残りの電柱の赤い炎は何としても忘れることなく私の瞳に残っています。戦争と言うものがどんなに悲惨なものかは語るまでもありませんが、戦争さえなければまだまだ生きられた。

戦死者、空襲で死んだ多くの人、勿論原爆の犠牲者の事を忘れてはいけません。私の戦争体験は空襲にそなえて、ただ懸命に生きたという事に外なりません。

私の歩んだ戦後50年

根岸彩子

それは私が2年生の時だったと思います。担任の先生が大きなお腹をかかえながら次のような話をしてくださったことが、今でも強く心に残っています。「日本の国は今では前進のみで勝ち進んできましたが今は、米兵にやられてどんどん後退し、本土に上陸されるかも知れません。そしたらみんな戦うのです。」と教壇の上で後退りの動作をしながら話されました。なにしろ敵軍が上陸してきたら女、子供全員竹やりで戦うのだと周囲の人達や家族の中でも話題になっていましたので、本当にそうなのかなあと自然にそのことを受け入れるような気持ちが私の中にあったような気がします。何もわからずに今思うと軍国主義一色とはなんと恐ろしいことでしょうか。

この頃から空襲警報のサイレンが頻繁になりました。その度に私達は防空頭巾（手作り）をかぶって班ごとに下校しました。途中上空に飛行機をみると敵か味方かの区別もわからないまま道端に小さく身をこごみ、通り過ぎるのをじっと待ったのでした。怖いというより、友達といつも一緒だという事が心強かったような気がします。

3年生になって疎開して来た人たちも多く50名以上の女子だけのクラス

になりました。そして8月15日終戦になりました。今まで勉強してきた教科書を处处スミで黒く塗りつぶす作業で1時間終わったこともありました。何か複雑な気持ちを持ちながら先生の言う通りにしました。「先生どうしてぬりつぶすのですか」など質問をする人は一人もいませんでした。あの頃何を学んだのか今でもはっきり覚えていません。体育館もプールも何もありませんでしたが、友達と鬼ごっこやかくれんぼなどしてよく遊びました。

5年生の時、ピアノが寄贈され、その発表会に「野口英世」の劇をしたのが懐かしい思い出です。ピアノをみたのもこの時が初めてで、美しい音にビックリするやううれしかったことを覚えています。

この頃は、家庭の食事本当に粗末なものでした。私の家は地主で昔から大きな農家でしたので、お米や野菜類など収穫がありましたが、それでも毎日毎日麦飯の中にさつまいもか大豆が入っていて、これがたまらなく嫌でした。母がお弁当分だけは綿の袋に米を入れて一緒に炊いて分けてくれたのがうれしかったです。当時は農繁期に1週間のお休みがありました。よく家の手伝いをしました。草むしりや食事作りと苦しい時代でしたが家族が助け合い、兄弟姉妹よくけんかや食べ物など取りっこもしましたが仲良く楽しく過ごしてきました。女学校へ行っていた姉たちとはよく話をしたり聞いたりしました。

中学生になってある日、朝礼の時校長先生が「日本に新しい憲法ができました。これからは男女平等です。女子はお嫁にいく時は必ずこの憲法をダンスの仲に入れて持っていくように」という話しをしてくださいました。そういえば男女共室、男女共学になりました。偏差値などなかった時代でした。石けりやなわとび、うまとびなどして良く遊びました。またこの頃茶色がかったザラザラした紙質の少女小説を胸をドキドキさせながら、借りたり貸したりしてよく読みました。「ああ無情」「小公子」「家なき子」「巖窟王」「路傍の石」「友情」などなど。

私にとっての戦後50年、食べ物も着る物も無い無いづくしの生活でしたが、それなりに楽しく助け合い、共に喜び、遊び学んできたような気がします。何もかも物質的に豊かになった今でも私は、物を大切に、家族の絆を大切に、日々感謝の気持ちで明るく、生き生きと心豊かに生きようと思っています。そして「どの子もみんな素晴らしい可能性を内に秘めているのだ。それをみつけ、気づかせ伸ばすこと」を信念に40年間教育に携わってこれたことを本当に幸せだったと思っています。中でも40年間のうち23年間新座市にお世話になり感慨もひとしおのがあります。

戦後50年、新座市制施行25周年、今年は時代の節目でもあり、私の人生の節目でもあります。今後も、時代を担う青少年の幸せのために何か役立つことができたらと思うと同時に、この子らのためにも平和が続くことを願ってやみません。

タマゴとファックス

北原眞一

戦禍激しくなったとはいえ山間地では子どもたちが緊迫した気持ちを持つほどではなかった。その日もいつも通り利根の清流で泳いでいた。上越線の水戸駅から谷川温泉に向かう町はずれに橋があるがその下あたりが私たちの遊び場であった。当時は吊り橋で、橋の上から魚が泳ぐのも見えたほど水も澄んでいた。

「青ん淵」といわれた青く深い淵があって、うず巻いているのを泳ぎ切ることは子どもにとっては勲章のようなものだった。その「こわい所」も今では岩床が露出している。五十年経って川の顔も変った。だいいち水量が減った。

子どもたちは清流に浸って体が冷えると、石に腹這いになって暖をとりながら雑談をする。それは子どもにとって至福の時間であった。そうしている時「日本が負けた」という知らせを運んできた子がいた。「そうか」といって、私は川原から引きあげた。日本が戦争に負けると米兵が押し寄せてきて殺されると思っていた。それなのに町の中に特に変化がなかったのが不思議だった。それでも鉄道官舎の前を通っていくと、泣き声が聞こえたのでたいへんなことが起こったと思った。

けれどもそれからの生活が食糧不足はあったものの急変したわけではなかった。終戦になった実感がわいたのはしばらく経ってからのことだった。わら半紙に印刷しそれを綴ったような教科書があって、それに墨をぬった。それも先生にいわれた通りしたことで、特に深い意味を知ってのことではなかった。

食糧不足であったものの父親のあとについて物と米を交換にいたり、農村にいて、カボチャを求めたりしても少しも苦にならなかった。背負うとよろよろする私をみて、「小さいのにねえ」と同情されてもそのことで家族の一員だという気持ちを持った。父は鉄道員だったので列車を利用した買い出しにいった。私も一緒だった。貧しい生活でも少しも卑屈にならなかった。

父は現実に直面したときの生き方をいわずもなが私に教えたのだろう。それからの私の生き方は現実に直面したものだった。特に子どもは現実が保証されていれば生きられるという実感を持った。毎日が新しい体験であり、未知のものへの挑戦を知らないうちにしている。その考えが一層強くなったのは山間僻地の小学校に赴任してからであった。

昭和三十年代、私は山村の小学校で子どもたちの現実に直面した。自分も自炊生活で即席ラーメンは食卓の必需品。教える子の母親がタマゴを売りに来たのでタマゴは毎日欠かさず食べ、それは今でも続いている。最近気づいてことだが、タマゴの値段はむかしも今も殆ど変わらないのは不思議である。タマゴこそはよき伴侶などと、生きぬく源になったことを称えたい。タマゴ一個で鶏一羽の生命体を持つとしたら既に二万羽弱の鶏を食したことになる。

群馬県の山間地の小学校で私は北方作文教育に興味を持った。「山びこ学校」も読んで子どもの現実を認識することが教育だと思った。それには子どもたちに書かせることだ。書かせたものは印刷する。当時はガリ版印刷で、ヤスリ版の上でガリガリと鉄筆の音をたてて原紙に書き写す。困難なことであつたが子どもの作品を書き写しているうちに子どもの気持ちが伝わってくる。「文集は夜作られる」といわれたところで、文集作りは教育の重要な要素になっていた。それと同時に私は「物語」をつくった。たまたま私の弁当にミミズがはいっていたことなどは「物語」のいい材料であつた。「煮てあるからだいじょうぶだ」などといって山村先生（物語の主人公の先生＝私）はひからびたミミズをとり除き、ごはんをおいしそうに食べた、というシーンはまさに私がたくましく生きている姿だなどと思って子どもたちとの生活を楽しんだりした。

謄写版印刷は一枚一枚刷るので時間がかかる。それが輪転機になってハンドルを軽く廻すだけで刷れる。文集づくりも楽になって作文教育に力を注いだのは昭和四十年代埼玉に来てからであつた。物を書くことは子どもにとっては現実を生きている証であり、教師にとっては子ども理解に最良の手立てである。

今生きているのは現実であり、現実に立脚して未来があるとすればまず今生きていることの証を認め合うことが教育ではないか。そのために書く。私の考えは変わらない。

子どもの作文を取りあげて文集をつくる仕事をしていく中で「ファックス」の出現はまさに驚異的であつた。今でこそコピーやワープロなどが一般化しているが、当時子どもの書いたエンピツ書きの文字がそのまま印刷でき、ま

さに手づくりの文集ができる。これは印刷の革命児であった。中学校の教師になってからは副教材として読ませたいものが楽に印刷できて教育の効果をあげたのではないか。ところで「タマゴとファックス」というタイトルもあながち珍奇ともいえない。私自身の戦後五十年の光と影の部分、タマゴが影でファックスは絶好な発光体であった。

平和へのメッセージ 細切れの伝言から

栄 篠原朋子

戦後五十年ということですが、私は今年四十才になります。戦後とはいえこの四十年は戦後を引きずりながら、豊かさへと、さらに悲惨な戦争などまったくわからない世代へと時代が人々に変化して来たのではないのでしょうか。

私は二児の母ですが、子供に物の大切さや命の尊さを教える為に戦争の話を持ち出すことはありません。私たちの世代で母親などからお米一粒も大事に戦争中の伝言は終わっているのかもしれませんが。それだけに細切れにすぎないので記憶をたどってみました。

私の母は、青森にいます。青森も激しい空襲は幾度もあったそうです。青森湾にそって町があり、その奥に森があります。空襲は民家を狙い、人を狙います。母は多くの人々と共に病気の母親をリヤカーに乗せ、弟妹の手を引き、たびごとに逃げたといいます。そのうちの何回かは走りきれなくなり、「弟妹をつれて逃げなさい！」の祖母の声に、田んぼのまん中にリヤカーと祖母を置きざりにして森にかけ込んだというのです。激しい爆音の中、母親を思い、弟妹の手をとりどんな思いで、田んぼを見守っていたことでしょう。

そんな田んぼの中である女性が、戦争に夫をとられ大きな腹で逃げまどううち、産気づき、苦しみ、誰一人助ける人もなく、大勢の町の人々が森の中から見つめる中、空からは襲撃を受けながら、一人股を広げて出産したというのです。さらに人々は「あの人は恥ずかしい人だ」と口々に言ったそうです。私達など病院で出産しても大変なものを、助けてくれる人もなく、あげくに罵倒されて、女であることが戦時下でこんな目にもあうのかと、今はなおさらですが、話を聞いた中学生頃でも、子供心に男女の不平等観を持って聞いたものです。

雨のように降る爆弾は多くの防空壕も襲い生き埋め状態で戦後を迎えているということですが、死者の霊を弔うこともできぬまま、知らぬ若い人々はその上に家を建てている場所が数多くあるといいます。

日頃子供達が食べ物を粗末にすると、アフリカの子供で食べられぬ子がどんなに多いかなどといいますが、戦中の食料難は聞くまでもないことです。豪農の祖父の実家に疎開した母の家族はまだ幸せだったことでしょうが、ある裁判官が「自分は人を裁く仕事をしているのだからヤミ米は食べられない。」と言って家族にだけ食べさせ、自分は餓死していったというのです。生命をかけて、仕事に対する責任を果たした方また多くの家族を失った方、苦しい戦中を生き抜いた方を思い、人間の生きる価値と大切さをもう一度、私達の次の世代へも伝えてゆかねばならないのではないのでしょうか。

ほんの少しのこぼれ話でしたけれど、豊かな時代にもかかわらず、いじめや自殺、単に進路についての話合いだけで親を殺しています。現在の本当の豊かさを感じとれないでいる人々が多いのではないのでしょうか。だからこそ細切れのこぼれ話の大切さを思う今日この頃です。

葉山御用邸の思い出

大和田 長谷部益一

私は、明治42年大和田の農家の長男として生まれ、今年で満八十六歳になります。明治、大正、昭和、平成と四代の天皇の時代に生きてきたわけですが、私が自分の人生で最も誇りに思っている事は、葉山の御用邸で、昭和天皇の警護に当たった事です。昭和6年5月13日から25日までの13日間、私は儀仗兵として派遣されたのです。

その時、日本全国から選ばれた近衛兵は、百十五名で二交替の勤務に携わっておりました。近衛兵は、宮城の近くで天皇を護衛する任務を負う、名誉ある兵隊でした。二重橋や宮城の賢所、御車寄せ等の歩哨に当たるのです。今から66年前の昭和4年12月1日、私も近衛兵として、青山近衛歩兵四連隊に入隊し、六ヶ月の教育を受け本科兵になりました。近衛兵の多くは、地方の農村出身でした。

私は、射撃が得意でしたので、ひっぱりだこで重要な場所の警備に当たりました。近衛四箇連隊のうちでも一、二の腕前であったと自負しております。特に昭和5年11月と昭和6年5月の二回、射撃で表彰されたのは私の最も喜びとしているものです。近衛師団の射撃大会では約五百米の遠距離から百二十秒間に二十五発の速度で全て、的に命中した記録をもっています。どうしたら速く、しかも命中率を確実に出来るかを、自分なりに研究し勉強していました。ゆったりした気持ちで、肩に力を入れず、姿勢をくずさない事が

大事で、一発必中を期します。命中することは、自分の命を守ることでもあるのですから。余談になりますが、孫が弓道の選手で、高校総体に出場したり、国体の選手に選ばれて川越市の教育委員会から表彰されたのも、私にとっては射撃に通じる思いがして、うれしいことでした。

私が、今でも敬愛の年をもって思い出すのは、葉山の御用邸のことです。御用邸は以外に質素な建物で、昭和天皇は朝早くから夜の更ける迄、魚介類や植物採集、昆虫の生態研究など熱心に御研究をされている御様子に感動いたしました。その上、警備にあたっている兵隊に対して、労をねぎらい厚く待遇して下さいました。それから六年後の昭和12年7月日中戦争が勃発しました。私は8月に召集を受け、9月に出来たばかりの独立迫撃砲第一大隊で、迫撃砲の訓練を受けたのです。

今年は、戦後五十年の節目の年と言ことですが、私は初めから、中国との戦いには疑問を持っていました。日本と中国は、言わば兄弟のような間柄であつたのであります。その中国人を敵にすることに抵抗がありました。ですから私は、攻撃してくる兵隊には銃を向けましたが、逃げる兵隊は撃ちませんでした。ある戦闘の最中、後方から敵が攻めてきたことがありました。逃げ遅れた一味が、隊からはぐれて後方にとり残され、我々の追っ手に廻つたのです。その時、我々は笑顔で敵を安心させ、気持ちをほぐしながら武器をはずさせ、戦闘をせずに話合いで捕虜にしたことは貴重な経験でした。撃ち合いをすれば、双方に死傷者が出たことは必定です。

隊の中では、現地の中国人を雑用係に使っていましたが、とても真面目で立派な人でした。どこの国の人間でも、良い人は良い、悪い人は悪いのです。私はこの中国人に親近感を覚えました。当然のことですが、先入観で人間を判断するのはよくないことです。どんな状況におかれても、真面目に仕事をやり遂げる態度に、私は尊敬の念を抱きました。その後の私の人生に、これは大きな収穫であつたと思います。

その後私は、一農民として生産の現場で、精一杯働いて今日に至りました。私の若い頃の体験は、その後の価値観の変化にも色あせることなく、私の心の中で生きてきてきたのです。

昔の諺に「得意に帆を揚ぐ」と言う言葉がありますが、自分の得意とする技を見出し、この様な働く場を与えて下さった上官や町の担当者に心より感謝しております。私が生涯の思い出として、いつも心の中に大切に思っていた事を述べてみました。

メッセージ

私が平和について思うこと

1971年にインドとパキスタンが戦争をしたとき、私はプーナに住んでいました。戦争中は、パキスタンの爆撃を避けるため、夜になっても町と家の中の灯りを消したままの生活でした。

戦争だけではなく、民族争い・宗教争い・ストライキなどでも世の中の平和が乱れてしまい、本来するべく勉強や仕事に熱中できなくなる。

この50年間平和だったことは、日本が経済大国になれた理由の一つであると思います。この平和が続きますように。

Dr. BAPAT VINIT 34歳

私は、終戦の明くる年、小学校1年に入学した。戦後の混乱期で社会は食糧難に瀕していた。学校に行っても紙も無く、通信簿さえ穴のあいた状態だった。生徒の中には食べる物が無く昼食時間になると廊下に出て皆が食べ終わる迄、待っている子もいた。

戦争当時幼かった私は、母の背に括りつけられ空襲警報を聞いた。部屋の電気を消し防空壕に逃げた。頭上ではB29が音を立て攻撃して来た。悪夢の様な空中合戦だった。東京の空は炎と化した。改めて平和を懇願する。

並木平八 56歳

小学校5、6年の担任教師の言動に、私はしばしば傷つけられていた。私が大学生になった頃、父母の批判が強くなり、先生は教壇を追われた。やっぱりと思ったが、私はそのとき初めて先生を許す気になれた。先生が学徒動員で、学生時代、勉強もできなかった戦争の犠牲者だと知ったからだ。戦争の記憶のない私にとって、教室のいやな思い出は戦争の傷跡のようなものだ。

平和な今、教師に傷つく子らは将来どんな許し方を探すのだろう。

谷合規子 53歳

烈しくなる空襲に、1944年夏、小6と小5の兄、小3の私は山形県の瀬見に学童疎開。男女別館で集団生活が始まり、上級生中心で自由がなかった。

その頃「もし戦争が負けたなら電信柱に花が咲く」という歌がはやった。1945年3月9日、10日夜明け、東京下町は大空襲を受け、小6の卒業で帰っていた兄と妹弟達は、死骸の山の中で生きのびた。

終戦後、親は私を迎えにきてくれ家族に再会、引取り手のない子が多く残った。

保坂フミ子 59歳

たった一発の「核」爆弾で、何十万もの人を殺すことができます。しかし、たった一発の核爆弾を製造するお金があれば、何万人もの飢えに苦しむ人たちを救うことができます。どちらが人間とし尊いでしょうか？

僕は今夏、フィンランドでホームステイをさせて頂きました。自然の美しさを目にし、言葉は不自由でもお互いに一生懸命交流しました。人類皆兄弟という気持ちを持てば、戦争もなくなり平和な世界が築けると思います。

久保佳之 15歳

敗戦後、新しい民主主義憲法と「男女平等」は、日本の平和と女性の解放を確立しました。女性は長い差別の歴史から、初めて参政権を獲得しました。

戦後50年、女性の自立と社会進出はすすみ、平和への取り組みにも大きく貢献しています。しかし、平和な日本社会は実現しましたが、実質的に真に男女平等な社会は実現していません。

『にいざ男女平等行動プラン』が、新しい男女の未来を拓いていくことを期待します。

竹森絹子 58歳

正直なところ、自分にとって戦後という言葉にはなじみがありません。生で体験していないし、その傷跡もほとんどないからです。そして、この平和という、現在当たり前に感じ当然の様に受けとめているものが50年しかたっていない事を不思議にさえ感じます。自分たちはこの日々の生活の前提となる平和を保ち、例え何が起ころうと力による解決を選んではならない。それがこの戦争が教えてくれた答えだと思います。

坂本周一 19歳

みんな平和に慣れすぎている。世界中を見回わせば平和という言葉なんて忘れてしまった人々がたくさんいる。それを直視し自分は何ができるかを一人一人考えてほしいと思う。

一人では小さなことしかできないとしても、その意志があれば何かができるはずだ。日本は裕福だからこそ、平和に対してもっと責任のある行動がとれるはずだ。私も、成人になる身としては、もう一度このことについては考えてみなくてはならないと思っている。

須藤雄太 19歳

「皆に最も大切にしてほしいこと、それは人をのけ者にしたり差別やいじめをすることを絶対に許さない心としない心である。悲惨な戦争は単に反対だけではなくならない。本当に平和をもたらすのは、人の心にある。すべての人に公平で平等な心をいつも持つこと、これが人の価値であり、平和の基である。たえず、このことを忘れずにいてほしい。」

教員であった私が、子供達に言い続けてきたことであり、信念としていることである。

匿名

今年戦後50年を迎え、各地で平和を祈る運期が見られるが平和とはいったい何だろうか。諸外国に目を向けてみると、植民地時代の列強の搾取の名残りによる貧困や共産主義独裁下での圧政、民族主義と大国主義との絡みなどによって今でも多くの人々が苦しんでいる。平和とはこのような新たな戦争を起こす危険な状況を不断の努力によって克服した状態のはずだ。戦争は目には目をととも言いが未然に防ぐには平和的手段で充分可能のはずだ。

鈴木健三 20歳

この夏、私は新座市の海外派遣としてフィンランドでホームステイを体験してきました。言葉をはじめ食生活や気候等日本と大きく異なりますが、たった3日間のステイでもお互い心を通じ合わせることができました。双方の努力と思いやりがあれば生活習慣の差等なくなり、心は国境を越え平に結ばれ、そしてそこから和が生まれるのです。このように平和とは、自ら生み出せるもの、生み出すべきものだと思身をもって学ぶ事ができました。

中川瑞葉 15歳

私たちは今まさに平和の時代に生きている。高度成長期の後に生まれ、物質的な豊かさを当然のごとく享受してきた私が、成人式を迎えるにあたって思うことは、精神的な豊かさについてである。精神的な豊かさとは、人間として当たり前のこと、守るべきことを見すえ、実践していくことだと思う。またそれは成人という新たな責任を加えたとき、真の豊かさ、そしてその根源にある平和への願いが生まれるのではないだろうか。

渡邊直子 19歳

新聞の国際面を開けば“内戦”の文字や兵士の写真が目に入ってくる。争いは人間がひき起こすことで天変地異のように避けられないものではないはずだ。戦後五十年という節目の今年、日本は巨大な地震で多くの人の命を失った。人間の自然に対する無抵抗さを思い知らされると同時に平和に暮らせることが決して当たり前でないことを感じた。しかし、何か事が起こる度に気付くのではなく、日常の中で忘れては行けないことだと思う。

匿名 20歳

短歌

ま と く
敗戦の厳しさ纏い引揚げ来

は は
老母泣きましぬ、ものも云へずに

斉藤芳香

五十年を経し、戦友よりの
ハガキ夫大切にせり戦死すせれば。
戦地での想ひ出尽きづ
長電話夫たづね人にて無事を問ふ

田山路子 59歳

原爆の洗礼受けし
我等こそ平和を叫ばむ声大にして
南海の藻屑と消へし

はたち
兄の顔二十才のままで我が胸に在り

森田綾子

戦中を戦後を生きて五十年

とわ
平和の二文字永遠にあれかし

たたかひ かばね
戦争の屍の上に枕して

今日ある平和語りつづけん

小田桐きみ 74歳

シベリヤより弟は還りぬ

還らざる若きを思ふ知覧の旅に

清水保子

きよ

浄らさを尽くししゆえの

あお

無残思ふ五十年忌の夏空碧し

たひらなる治世守らねばの

思ひ深し壊すにやすき戦後史ののち

松本千恵子

終戦の重大ニュース

はたち

ありし日は二十の夏の日盛りなりき

島田知以子 70歳

せめ

聞ぎあひ今なほ続く

ただ

さはあれど核持つ地球に生きて正さな

諸貫信子 74歳

ひごゆりえ

てのひら

曾孫友里恵ぐっと握れる掌に

とわ しあわせ

永久に幸福つづくを願ふ

岡野正子 77歳

市制施行25周年及び戦後50年記念事業

私 た ち の 記 憶

—POST WAR 50 YEARS—

平成7年(1995)11月発行

編集・発行

新座市企画総務部企画課

新座市野火止1-1-1

TEL048-477-1111 内線224